

市民科学通信

2024年11月号

(通算54号)

2024年11月28日発行

発行: NGO 市民
科学京都研究所

事務局 E-mail :
sigemo.nao@gmail.com

目次

| | | |
|-----------------------------------|-----------|----|
| NGO 市民科学京都研究所 第25回市民科学研究会のご案内 | 事務局 | 02 |
| 【随想2】ネットワークは誰のためか | 青水 司 | 03 |
| 長生きは本当に幸せか | 塩小路橋宅三 | 07 |
| 新入所員の自己紹介・追伸 | 青野豊一 | 09 |
| <覚え書き(「市民科学通信」サロン、2024年11月3日)> | | |
| ザーラ・ヴァーゲンクネヒトという「左翼のあり方」 | | |
| —照井報告「ドイツの政治状況」から考える— | 重本冬水 | 12 |
| 【翻訳】オスカー・ラフォンテーヌ | | |
| ・インタビュー(上) | (訳) 照井日出喜 | 19 |
| <眞島正臣さんへ> | | |
| S野英二さんの『ユングフラウの月』、読みはじめました | ひとりごと | 29 |
| <グラフィティ・エッセイ=元上司への手紙> | | |
| 社会と建築の話—隈研吾への批判の是非— | 眞島正臣 | 30 |
| 【資料】ヨーロッパにおける文化の危機的な現状 | (訳) 照井日出喜 | 39 |
| 新書散策の旅(シリーズ第18回) | | |
| …「とりあえずやってみるか! 『実験の民主主義』から学ぶ… | 宮崎 昭 | 43 |
| 【備忘録2】「コミュニケーション資本主義」、 | | |
| そして「文化社会」への変容、その2 | | |
| —GAFAの「文化」、似非能動性と一望監視的な装置— | 重本冬水 | 47 |
| 私人が発展すればするほど、個体形成の条件が成熟する | 竹内真澄 | 49 |
| むっつり助平 | 竹内真澄 | 51 |
| 農本主義のなれの果て—進歩にとっての障害者を封じこめる手だて(一) | 青野豊一 | 52 |
| 近況短信: ファンタジーにある「老い」 | | |
| —団地タクシー奮闘記「脚の社会的価値」の巻—(24) | 宮崎 昭 | 58 |
| 【研究ノート】市民の平和力とは何か(中・続)(3)-3 | | |
| 「文化の超自我」と交換様式論 | 中村共一 | 60 |

NGO 市民科学京都研究所 第 25 回市民科学研究会開催案内

日時；2024 年 12 月 8 日（日）13:30～17:30

場所；キャンパスプラザ京都（6 階、龍谷大学サテライト教室）＜京都駅前、中央郵便局西側＞

主催；NGO 市民科学京都研究所（主担当；原発問題共同研究プロジェクト）

協力；京都自由大学、NGO 京都社会文化センター出版会

ZOOM 参加可能；京都自由大学 HP から <https://kyotofreeuniversity.wordpress.com/>

《テーマ》 原発問題と「市民の科学」—科学技術の「転倒性」・「中立性」を超えて—

《開催趣旨》

NGO 市民科学京都研究所は「原発問題共同研究プロジェクト」（担当；青水・重本）として長年このテーマに取り組んできました。年報『市民の科学』第 4 号(2012 年)で「原発はいらない—共生社会の市民科学—」の特集を組み、その後、同誌で「原発ノー！論」に取り組んできました。また、ブックレット版として青水司『原発と倫理問題—反原発運動前進のために—』（2014 年）、竹内貞雄『技術における倫理—原発技術の不可能性と共生のマネジメント—』（2015 年）、中村共一『なぜ、共生倫理なのか？—社会と市場経済—』（2016 年）を発行し、『市民の科学』第 12 号(2022 年)では「対論；科学フェティシズムと市民運動」を掲載しました。原発問題は「国家の科学」・「資本の科学」の特徴を浮き彫りにしています。これに抗して「市民の科学」を提唱しています。

本研究会は「福島第一原発事故後の小児甲状腺がん被ばく発症」の報告から始めます。宗川さんは、「福島県県民健康調査報告」をふまえて小児甲状腺がんの増加について「放射線誘導発症の第 1 波は、放射線による免疫機構の障害に起因し、障害の程度は被ばくのレベルに比例する」と述べ、小児甲状腺がん発症についての二つの異なる影響を「初期の効果は免疫機構の障害によるものであり、後期の効果は幼児期における遺伝子変異による」と述べています。甲状腺がんと診断された方 6 名が 2022 年 1 月に提訴した「311 子ども甲状腺がん裁判」において被告東電は「福島原発事故によって 100 ミリシーベルト以上の被ばくはなかった。それゆえ、被ばくによって小児甲状腺がんは発症するはずがない」などと発症を否定しています(下記宗川稿邦訳文献より)。

原発問題から科学技術の「転倒性」と「中立性」および科学運動のあり方を根本的に問い直し、「転倒性」の再転倒と歴史性・社会性を包摂した科学技術の新たな思想と方法、そして科学運動に資することを本研究会の開催趣旨といたします。

《報告タイトルおよび報告者》（司会；中村共一＜NGO 市民科学京都研究所代表理事＞）

1) 「福島第一原発事故後の小児甲状腺がん被ばく発症」

宗川吉汪（京都工芸繊維大学名誉教授）

※参照文献；Sokawa, Y. Radiation-Induced Childhood Thyroid Cancer after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident. *Int. J. Environ. Res. Public Health* 2024, 21, 1162. <https://doi.org/10.3390/ijerph21091162>（宗川宛にご連絡いただければ日本語訳のパンフレットをメールでお送りします。宗川吉汪：sokawa@snr.kit.ac.jp）。

2) 「核科学技術と自然・人間の転倒性—JCO 臨界事故と福島原発過酷事故を問う—」

青水 司（NGO 市民科学京都研究所専任研究員）

※参照文献；青水司「『朽ちていった命』と『災害からの命の守り方』を繋ぐもの—JCO 臨界事故と福島原発過酷事故を問う—」（『経済』2024 年 6 月号）。

3) 「社会に対する科学者の科学的責任—『科学の価値中立性』を超えて—」

重本直利（NGO 市民科学京都研究所専任研究員）

※参照文献；重本直利「『科学の自己目的化』から人間の価値を含んだ科学へ」、『市民の科学』12 号、NGO 市民科学京都研究所、2022 年 6 月(80～90 ページ)、重本直利「社会に対する科学者の科学的責任」、「市民科学通信」51 号、2024 年 8 月。

4) 全体討論

《随想 2》

ネットワークは誰のためか

青水 司

「フェイク」の補足

前号（53号、2024年10月）で「ネットワークとフェイク」について書きました。メディア（テレビ）の小さい問題ですが、メディア自らがフェイクを率先して行っているという意味で重要と思いますのでつけ加えます。以前からドラマや映画番組の前半はコマーシャルをあまり入れず視聴者に集中させます。そして後半の視聴者が集中して事件解決などを観たい場面にコマーシャルを集中的に入れる手法を採用してきました。これは姑息な手段ですが、フェイクとまでは言えないと思います。しかし、いつからか不明ですがコマーシャルの内容と入れ方が一層姑息になってきました。たとえば、ドラマの人物とコマーシャルの人物を同じにして、ついコマーシャルを見させるなど内容が姑息になっています。また、通常コマーシャルは1コマ3分くらいですが、これを2分半で1回止めてドラマが再開すると思わせてさらに30秒くらいのコマーシャルを追加し視聴者が見ざるを得ないように誘導するのです。ここまで来るとフェイクです。一方で、報道番組では「フェイク批判」を行いながら、他方で自らフェイクを率先して行うという矛盾したことを行っています。コマーシャルを入れるスポンサーへのリップサービスです。

少しそれますが、このようなことはスポンサーの気に食わない、あるいはスポンサーがつきにくいポルターージュなどの番組は夜中しか放映されないことにも繋がります。さらには政府の気にいらぬ番組の自粛にまで展開します。また、電力会社や国は“原子力は二酸化炭素を出さずクリーンだ”というコマーシャルを流しているのに対し、一青年が日本広告審査機構（JARO）にその正当性について審査を求めました。JAROは「原発あるいは放射性降下物等の安全性について一切の説明なしに、発電の際に二酸化炭素を出さないことだけを捉えて『クリーン』と表現しているため、疑念をもつ一般消費者も少なくないと考えられる。したがって、『クリーン』と表現すべきではない」（2009年11月25日）と明確に裁定しました。二酸化炭素を出さないのは発電の際だけです。発電前後の工程とくに核分裂性ウランの濃縮工程では全工程の6割前後の二酸化炭素を大量に放出しています。しかも発電工程でも海水を7℃も上昇させる温廃水を放出し、海水中の二酸化炭酸を蒸発させています（地球上の二酸化炭素の大部分は海水中に存在

する)。電力中央研究所は原発の二酸化炭素排出量がどの再生可能エネルギーよりも少ないと評価していますが、この温廃水による二酸化炭素の蒸発を評価していません（小出裕章 [2010] 70-76 ページ）。さらに、忘れてはならないのは原子炉を建設、廃炉過程とくに福島のような過酷事故の後始末に必要な資材とエネルギー、そのための二酸化炭素の放出量は測り知れません。「クリーン」などとんでもない「フェイク」です。しかし、JARO は民間の機関で強制力を持たないので、電力会社や国はこの裁定を無視して「フェイク情報」を流し続けています。

ネットワークの社会的問題についてはすでに取り上げたことがあります。近年では堤未果 [2023] 『堤未果のショック・ドクトリンー政府のやりたい放題から身を守る方法』などが優れていると思います。できるだけわたしの経験や事実を手掛かりに考えますが、堤さんなどの著作からもヒントをいただきたいと思います。

ネットワークはわたしたちに有用か

ネットワークなどの技術がわたしたちにとって有用なのかについて検討し、技術の発展について考えたいと思います。かなり以前から電車やバスのカードが IC カードに統一化されてきました。それまでは、カードは交通機関によって別々でした。そして、カードの割引も各社独自でした。たとえば通勤に利用していた京阪バスは 1 番割引率が高く昼間割引は 20% 以上、通常割引でも 10% 以上だったと思います。最後に回数券が残った JR でも 10% 割引でした。大阪市バスと地下鉄はカード共通で 10% 引きが現在も残っているはず（京都も同じだと思います）。年金生活者で病院通いの多いわたし達には痛手です。このように値上げし（割引をしない）、そして切符の駅員からの直接購入を減らすことによって駅員を削減し、その分自動販売機による購入者の「労働」負担を増やすわけです。こうして、ネットワークを構築、拡大するために設備投資をして合理化を推進し、「カード 1 枚でどの交通機関でも乗れます」など大して「便利」でもなく、ましてや余分な金を使わされて有用どころではありません。逆に、どの電車にはどのカードを使うか少しの脳の活動さえ奪うだけです。このように、設備投資は消費者のためなどではまったくなく、投資先を求める資本のためでしかありません。これらのことは交通機関に限らず、スーパーマーケットなどでも同様です。共通カード化してもわずか 1% 割引程度です。こうして、カード 1 枚、いやスマホ 1 台にあらゆる情報が詰め込まれることになります。近年、家族が死亡した時の財産のリストがスマホにあり、暗証記号が分からず困ることといったことが話題になっています。わたしはスマホはもちろん、ガラケイも持っていないので心配ありませんが、それどころではない問題を下記で堤さんが警告しています。

マイナンバーカードは必要か

次にマイナ保険証の「便利さ」のウソについてですが、わたしは20年くらい前から病院間の医療情報の相互提供を提案してきました。それは全国的でなく府県単位くらいのもので、それ以上になると国家をはじめとする誰かによる情報漏洩や不当な情報取得の危険が大きくなるし、ネットワーク・システム構築費用も高くなるからです。それに対して中核病院となる大阪大学附属病院は資金がないというだけで受け付けませんでした。口先では患者様と言いますが、研究第1で私たち患者のことなど念頭にありません。現在、近所の繋りつけ医院などと吹田市民病院に通院しています。かかりつけ医院はUSBメモリーに報告資料を記録して持っていき医師のパソコンに接続できます。しかし、吹田市民病院ではUSBメモリーは個人情報保護を理由に持ち込めず紙に印刷して医師に提出します。わたしは全国的で総合的なネットワークには反対ですが、吹田市内の医療機関だけのネットワークなら患者のメリットになると思いますが、全く受け入れられませんでした。しかし、マイナンバーカードは膨大な費用が必要で、患者や市民には情報漏洩どころか知らないうちに情報が国などの権力機関に集められ、たとえば節税など出来なくなります。ということでマイナンバーカードで情報を集めることは考えるが患者や市民のことなど軽視・無視しています。2万円につられてマイナンバーカードに加入してもわたしには何の有用性もありません。それどころかお金にかえられない損失が待っています。政府はマイナンバー制度が外国では常識だと言いますがとんでもありません。次の書をご覧ください。「デジタル関連法案」（堤未果 [2023] 105-106 ページ）と「デジタル化の問題と政府にやらせないための10カ条」（堤未果 [2023] 145-147 ページ）を読めば総合的な問題と対策が分かります。その基本は当然の「リスク分散」と「脱個人番号」です。加えるならその根底に自由と民主主義が必要だと思います。スマホを所持しない人が10%、携帯を所持しない人でも数%いるのですから当然です。

おわりに

振り返ると、2011年の東日本大震災以降の「ショック・ドクトリン」の進展は急速です。そのひとつに、世界最大の米系コンサルティング会社・アクセンティアが会津若松市に同年8月イノベーションセンターを設立、復興支援の名のもとにスーパーシティを展開し全国に広めています。以前にも書きましたが、コロナ禍の「緊急事態宣言」を受けて2020年4月13日、吉村洋文大阪府知事は企業には休業、在宅勤務を強く要請しましたが、足下の大阪府庁のほとんどの職員には在宅勤務はありませんでした。吉村知事は「テレワークの環境が整っていない」と言っていましたが、結局4月末在宅勤務環境整備のために補正予算を通過させました。ところが、3月31日の「スマートシティ」戦略策定は不要不急なのに強行し、不要不急どころか有害な「カジノIR」の準備（2020年度予算・職員費5億4千万円、事業費2億3千万円）も止めませんでした。まさに、

「ショック・ドクトリン」です（青水 [2021] 85－86 ページ）。

追記

前号で兵庫県斎藤知事について述べましたが、予想通りのことがソーシャルメディアで行われたようです。マスメディア（テレビ、ラジオ）でしか情報を得ていませんので不十分ですが、立花孝志氏が立候補し斎藤氏を支援したことで、街頭インタビューで年配の女性が「ユーチューブしか信用しません」と語気荒く答えたのでほぼ様子が分かりました。その点に関して重要なことは、あれだけ斎藤知事批判をしていたテレビでは「暗闇選挙」とはいえ知事選挙についてほとんど黙して語らずであったことです。開票後、コメンテータがわずかに反省の弁を述べていましたが、ネットワークの構造や運営に大きな問題があるとはいえマスメディアの罪は重大です。

文献

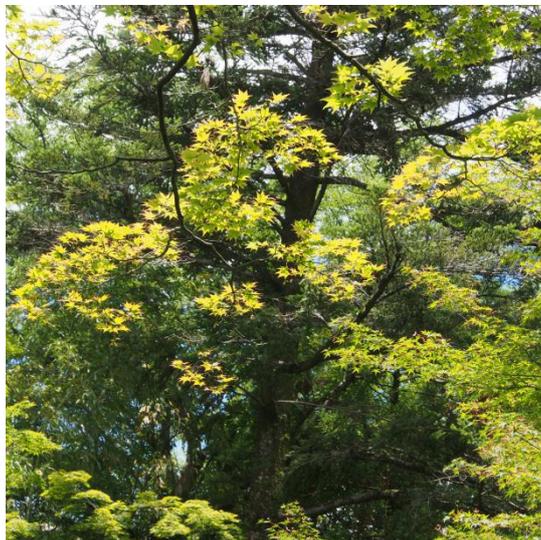
青水司 [2021] 「吉村大阪府知事と新型コロナ危機－評価の裏にあるもの－」『市民の科学』第 11 号、NGO 市民科学京都研究所、2021 年 1 月。

小出裕章 [2010] 『隠される原子力・核の真実－原子力の専門家が原発に反対するわけ』創史社。

堤未果 [2021] 『デジタル・ファシズム－日本の資産と主権が消える』NHK 出版新書。

堤未果 [2023] 『堤未果のショック・ドクトリン－政府のやりたい放題から身を守る方法』幻冬舎新書。

（あおみ つかさ）



長生きは本当に幸せか

塩小路橋宅三

今まで長寿はめでたいことであると思っていた。長生きすれば経験が豊富なために、いろいろな人から頼られることが多いと信じていた。子どものときに「その件は長老の〇〇さんに聞けばよい」との言葉を耳にしたこともあった。今はネット配信のパソコンやスマホのほうが確実性があり、もはや「亀の甲より年の劫」は死語となっている。長老も長生きしすぎて認知症になっているような状態では、敬老精神などは発揮のしようもない。今回、病院に長期入院して右胸のCVポートを使って栄養補給の点滴をされていたことを考えると、口から食べられなくなっても生きながらえることを実感した。全身麻酔での手術を受けた時には、そのまま麻酔から覚めなかったらどうしようと思って手術を受けたが、むしろずっと意識がないほうが良かったのかもしれないと思うこともあった術後である。90歳を超えるような高齢者の口からは、眠るように楽に死にたいとの声もよく聞く。年寄り同士の口喧嘩では「あんたなんか死ね」という罵声よりも「あんたなんか楽に死ねへんわい」との言葉を耳にする。その時に全身麻酔の経験が思い浮かぶのである。気持ちよく麻酔で眠っていて意識が戻らないほうが幸せだったのかもしれないと。

退職後の終身医療保険や入院特約付きの生命保険は、長生きのリスクに対する保険であることに疑いの余地はない。健康で長生きなどということはあり得ないことなのである。長生きをすると必ず健康を損ない、病から死に至ることとなる。それでは衰えた身体の高齢者はムダな存在なのだろうか。ここには人間社会にとって有益か、そうでないかの価値観が関与しているようである。腕にとまって血を吸っている蚊に対して迷わず手で叩いてしまう行為は老若男女共通である。自らの血はムダになったと考えられるが、蚊の存在はムダなのであろうか。そのようなことを深く考えもせず殺虫剤で駆除してしまうだろう。果たして、高齢者と蚊の違いはどこにあるのだろうか。人間社会において生産活動に加わらずに消費だけの人間はムダと言えるのだろうか。人間以外にも気付くこともある。たとえば農業にてトラクターが発明されたため、それまで活躍していた牛馬はムダになったのだろうか。そのようなことに思いを巡らせば、火葬のための棺桶などはムダの極致となる。しかしながら現代社会において、今なお棺桶製造業者が活躍しているのは人間の社会文化のなせる業と考えられる。消費があるから生産を喚起する。高齢者は消費によって社会貢献している、否、誰かの金儲けの手段対象となっているだけかもしれない。長生きしている高齢者を蚊や牛馬、さらに棺桶に例えて恐縮なのであるが、延命蘇生処置と殺虫剤は紙一重と思える。

現代は健康が商品化されている時代である。有史以来、人類は食糧の獲得のためにエネルギーを費やしてきた。人間以外の動物もその日暮らしの狩人で、非力な人間もむしろ食べられる運命であった。多くの人間と動物は今なお飢えに苦しんでいる。そうなるとペットフードなるものはムダなのであろうか。人間も欠乏の歴史であつことに異論はない。それがために戦争が起こると考えられていた。多くの人間が生き延びるために死んでいった歴史がある。しかし現代の戦争は必ずしも食糧の奪い合いではない。自らの種の保存のために殺されることも顧みずに人間の血を吸う蚊を笑えた存在ではないと考える。人間は長生きをしたために悩むことも増えることとなる。生を無条件に肯定し、死を否定的に考える医療が存在している限り、悩みは累乗的に増加する。

犬猫の延命治療が進歩したとしても、そのことによって悩んでいる様子は彼らにはない。悩んで死に至り葬られるのは人間の社会文化なのである。そこに健康を商品化した消費文化が入り込んで、誰かの金儲けの手段となる。「医療」「福祉」「教育」の分野は市民的公共性の世界なのであるが、人よりも金となっている。

現在に至るまで、経営学ではポジティブ・ケイパビリティばかりを探求してきたのであるが、ネガティブ・ケイパビリティという語句を注目している。人間と社会の関係を人文科学では人間のほうからアプローチしようとするが、経営学のような社会科学においては社会の有り様を規定しつつ人間に言及していくのである。今まで、分からないことをポジティブに分かろうとしたことが科学の発展と考えていたが、世の中には人間の頭脳をもってしても分からないことのほうが多いと考えられる。ネガティブ・ケイパビリティとは答えがないことに無理に答えを求めることを断念する能力とでもいえることである。つまり、敢えて「求めない能力」である。たとえば死後の世界などである。人間は動物と相違して自らの死が起こることを全員が知っている。その実態が分からないゆえに曖昧な不安に陥るのである。死を恐れない人間などいないはずなのであるが、そのことを先送りして何かの解決方法を見つけようとする。長期的には皆死ぬのであるが、それを意識的に忘れて明るい未来を思いつつ生きている。今生きているということを実感しつつ明るい未来があるような幻想に埋没しているのである。死後の世界など誰も分からないのが当たり前で、それゆえに宗教が存在する。宗教などを分かろうとするのはまやかして、分からないことであるから頭を働かせようと想像するのである。死ぬことによって神や仏になるならば多くの人はいち早い死を望むはずである。ところが、早く死ぬという宗教は存在せずに、この宗教の力が人間の生き方に大きな影響を与えることになる。それならば、分からないままに信じればよいのである。そんな宗教など信じないというのもある種の宗教である。敢えて不可思議な世界に身を置くと、長生きの本質が少しだけ見えてきたように思えるのである。

消費する世代はムダではなくて次の生産を生むために必要などといった結論にはしたくない。そのように主張する人道主義の装う仮面の裏には経済的効率性が潜んでいる。つまり、長生きをする人は金儲けのために必要なので、利用できるまで生かしておけが結論である。生産人口から有益として考えられる消費だけする高齢者を長生きさせておく理屈は、まさに資本主義の宿痾である。そうではなくて長生きしてよかったと言える社会文化を育てていかななくては、高齢社会における消費文化の資本主義生産が金儲けとして長生きし続けるのである。卑近な例で言えば、新型コロナウイルスに対するワクチンなどである。高齢者の命を救うと言って若者に接種を強要した事実は忘れてはいけない。

(しおこうじばし たくぞう)



自己紹介・追伸

青野 一豊

追伸 1

ブルードンの社会改革案の意図―農民を引き連れて社会の進歩を獲得する手立て

ブルードンはいろいろと社会改革案を提示したが、これは、「国民の本当の腐敗部分・進歩にとっての真の障害」である農民たちを「やっつけて封じこめる手だて」なのであったと言えよう。

市場経済の中では、このシステムが主導的社会経済システムの中では、農産物はその時の市場価格で買われてしまうことになる。安く買ったたかれる。農産物の出来不出来は天候次第であることは、21世紀の現在も同じである。肥料を土に入れてたくさんの世話をしても、最終的な収穫量は、その時の天候次第である。雨が降りすぎれば草と虫で収穫物は減る。降らなければ、作物は枯れていく。農家にそれなりの現金収入が得られるのは、現代農業でも、野菜栽培では4or5年に一度である。ビニールハウスにすれば、この天候の影響は減るが、管理と維持にたくさんの金銭と人手がいる。暖房のための石油の価格は上がっている。

農産物の価格が市場しだいということは、自分の管理している土地の天候が良くて、他の地の天候が悪くて作物が不作の時だけに、このような天候の時に農家にそれなりの現金収入が入る。反対に、この地の天候が悪くて、他の地の天候が作物に適していて豊作となる時は、赤字経営となる。ここに、市場経済の欠陥がはっきりと出ている。これは、他者の不幸で利益を得るという経済システムである。連帯感を育まないシステムである。ここに、農民たちが一つの階級・階層として目覚めない原因がある。隣の不幸が蜜の味なのだ。この意識が、露骨に作用している。

このような市場経済をさらに推し進め、土地と労働力と資本まで市場で売買して、資本力のある者が利益を得るのが資本主義経済システムであるが、この現実を緩和するものとして、互酬的贈与経済がある。生産される物を交換・消費するたびに返礼の義務感情を持ち、他者を支援することを促されるものである。ここには、べつとりと人間関係が張り付いている。この交換関係を多用していく事で、安価な取引をしなくてすむことになる。贈与交換は、個人的欲得や意志だけで行われるものではないことを理解しなくてはならない。それに反してなされることもあるからだ。この不思議な作用、神でもない、人によるものでもない不思議な力によって、・・・。

樽職人であり、ほんの少しの農地を所有する貧農の子であるブルードンは、田舎の自然の中で生育している。そのためか、大きくなって手放しといってもよいほどの田園賛美をしている。しかし、彼はロマンチックな農民社会主義者ではなかった。田園のなかで育ち、農民のありようを知りつくしていたブルードンは、だからこそ農民に対して幻想をいだかない。かれは農民を厳し

くリアルに見つめている。眼前の農民たちへの厳しい視線がある。これが、ブルードンである。物事を単純に賛美したり、批判したりしていない。「手帳」に次のように書いている。

農民の思想は人民の思想ではない。ド・バルザック氏は農民の醜悪さを描き出したが、それはすべて当たっている。フランスの人口の大半をしめるこの農民。かれらはもっともおぞましく、もっとも利己的で、もっとも心が狭く、もっとも金銭に汚く、もっとも保守的で、もっとも偽善的な階級であり、もっとも過激な所有者なのである。この連中の心根の卑しさによって、地主や工場主や大商人たちの所有に対する真正面からの攻撃は妨げられている。陰険な土地どろぼう、商取引ではずる賢くたちまわろうとするこの農民こそ、国民の本当の腐敗部分である。体制はそこから力を得、それによって支えられている。[……] 進歩にとっての真の障害、それが農民だ。農民と労働者は、中世時代の農民と貴族と同じくらい対立しあっている。いまでは農民がかつての貴族に相当する。[……] この連中をやっつけて封じこめる手だてを見いださないかぎり、農民をひきつれたまま進歩らしい進歩を獲得するには百年以上かかるであろう。逆に、その手だてが見いだされたならば、進歩はまたたく間に得られよう *「手帳」

ブルードンは、人民銀行からの融資を受けて、農業経営の改善を図ることができる案も提案している。さらに、国家行政や地方行政による「公助」である「収奪・再分配」システムとしての所得補償や「固定価格制」も、農民たちの生活を安定させる方策であろう。こうすることで、「その手だてが見いだされ」、社会の「進歩はまたたく間に得られよう」と述べている。

「利己的で、もっとも心が狭く、もっとも金銭に汚く、もっとも保守的で、もっとも偽善的な階級であり、もっとも過激な所有者」という言葉は、現代日本の農村社会にも通じる言葉であろう。まあ、一言で言えば、「田舎の毒」について書いていると言える。この毒は、少しの土地を所有して農作物を栽培していることから生じる意識(所有欲)に基づくものである。これは、欲得に深くとらわれている意識である。隣の家の作物が良くできて収入が増えると、激しくネタミ、そしてひがむ意識である。そして、都会の労働者たちを自分達より下に見下したいと言う何とも言い難い差別的視線を有している意識である。

ブルードンは農村・農民を愛するがゆえに、その醜さが目に付いた。ブルードンの思想は、進歩にとっての障害物＝農民たちを封じ込める手立てを思考したとも言いえるものである。これに対して、都市に住むインテリであったバルザックは農民たちに対して、「未開人をみるのに、何もアメリカまで行くことはない」とまでのべているそうだ。農民たちを、アメリカやアフリカの野蛮人を観るかのごとき視線で述べている。愛することもなければ、憎むこともない。都市出身のインテリたちから観て、彼らを自分たちと同じ人間とは思えなかったのだ。考慮の対象外であった。彼は、ルイ・ブランと同じような農民観である。そして、これは、現代日本の都会の戦後革新派のインテリたちの思考でもある。彼らは、悲しいかな、何にも分かっていないと言える。彼らの思想性では、「進歩にとっての真の障害」を克服できないままとなろう。

*ブルードンは、批判されるようなアナキストではない。これは大きな間違いである。多くの人たちは教祖マルクスの言葉をそのまま信じているだけである。著作を読むことなく、そしてあの当時のフランス国内の歴史を知ることなくして、一方的に批判している。ましてや、「無政府主義者」ではない。そもそも、アナキストは、無政府主義者ではない。翻訳の間違いである。

追伸 2

「田舎の毒」についての追加

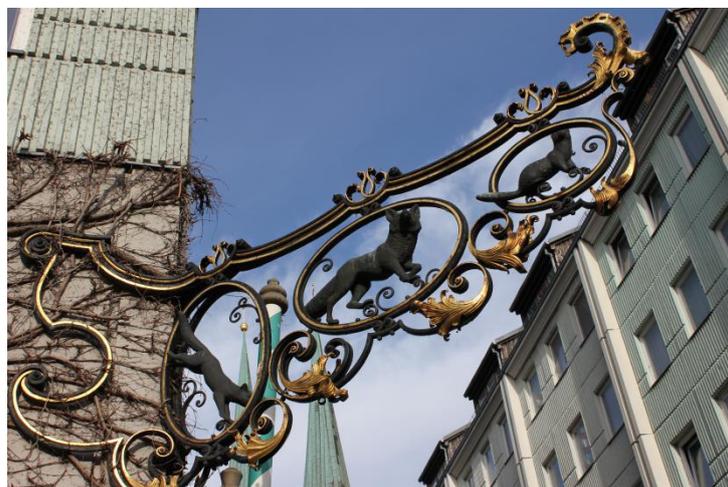
またまた、なかなか理解できないであろうことを書きましたので、追加します。「田舎の毒」についての追加説明です。

「お金より人間関係」を重視しようとして都会の無縁社会を批判して田舎の人間関係を賛美する人がいるが、……。しかし、ここにはべったりとした悪弊がある。これは、社会的流動性が薄いことが大きく関係している。そのため、隣の家と比較して優越感に浸ったり、ひがんだりする。足の引っ張り合いをしているのが、実際の姿である。

私の隣人は、共産党の支持者であった。観音寺市の共産党の人がたびたび来ていた。この人の父親が彼の小学校時代に死に、生活に苦労した経験がある。周囲の家と比較して、彼の心は大きく傷ついたのだ。それが、共産党支持になったらしい。でも、この政治的なことについては、周囲の人たちには一言も言わない。そして、彼は自分の利益に強く固執する。ほかの人たちと一緒によくなるなんていう意識はない。まあ、彼は、マルクスやレーニンなんていう思想について何も知ろうとはしない人であったが、……。この人はお金の事ばかり話をして、お金が溜まったことを自慢する。そして、それ以外のことは、儲けにならないことは無視する。

このような人たちにとって、「ボランティアなんていうことはアホのすること」なのだ。この人にとっての共産党支持と自分の日常の行動とは、どのような関係にあるのか、……。不思議なことである。年に一度の地域住民たちによる「河川清掃」という行事があるが、何と言いますか、これをしないのだ。隣の集落の人たちみんなが悪いと言うのではないが、15軒のうち5軒程度の人たちが、このような考えである。こうなると、その他の人たちも、何にもしなくなる。全町一斉の行事なのだが、この地区の人たちは、冬の寒風の中、川べりで2時間程度立ち話して過ごしている。年に2時間程度の労働奉仕さえ、しないのだ。

(あおの かずとよ)



<覚え書き（「市民科学通信」サロン、2024年11月3日）>

ザーラ・ヴァーゲンクネヒトという 「左翼のあり方」

—照井報告「ドイツの政治状況」から考える—

重本冬水

《照井報告を聞いて》

照井さんの「ドイツの政治状況」の報告の主題は3つです。私の問題関心から表現すれば、①何故、2013年に生まれた極右 AfD（ドイツのための選択肢）が台頭しているのか、②現連邦政府（SPD、緑の党、FDP〔自由民主党〕の「信号機」連立政権）の「凋落」は何故生じているのか、③左翼党の分裂から2024年1月に生まれたBSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）は何故支持を広げているのか、この3つです。

極右政党 AfD が短期間に何故台頭し一部の州では第一党に躍り出たのか。戦後80年、「日本の政治状況」は「極右」（戦犯内閣、戦争責任・戦後補償の回避・忌避、戦前回帰＜教育勅語回帰、旧帝国大学中心の大学制度、君が代・日の丸、明治以降の法・制度の残存、天皇制国家主義回帰など＞）の自民党の政権がほとんど支配し続けたのは何故か。この問いがありますが、ドイツの政治状況とは歴史的にみても政治的にみてもかなり異なります。だが、日本でも一時期、ドイツの現連邦政府の「信号機（赤・緑・黄色）連立政権」のように自民党に代わる政権が生まれましたが、いずれも短命に終わっています。

ドイツの左翼党の分裂によって生まれたBSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）の躍進、ドイツにおける左翼政党の動き、照井さんの報告を聞いてドイツの「左翼のあり方」に注目したいと思いました。それは「右翼のあり方」と共に日本の「左翼のあり方」とも異なるようです。今の日本では「左翼」という表現は死語に近くなっています。「右翼」という表現も死語になっているようですが、こちらは長年の極右政権の支配で「右翼」が社会を隅々まで覆おうとしていますから「死語」（あえて使う必要がない意味での死語、極右政権の支配が「普通」）になったことからと思います。照井報告から学ぶべき点は多々あります。以下では特に興味深く思った点を述べていきます。ただ、私の理解に誤りがあるかもしれません。照井さん、ご容赦下さい。

1点追加しますと、照井報告で、経済的には日本の一人あたりの名目GDPはドイツの3分の2以下に過ぎないとあります。日本は明らかに「経済小国」です。ただ商品とカネにまみれているだけの見せかけの「経済大国」に過ぎません。そうしますと日本は政治的にはカネまみれの極右政権が長年続き、同時に経済的には「経済小国」になってしまったに過ぎないということかと思えます。また、これまでの照井さんの「通信」掲載原稿から、日本はドイツとは比べようもない「文化小国」です。「こんな国に誰がした！」と言いたくなります。さらに、日本の難民認定数のあまりに少ない現実、極右 AfD さえもこの数には驚くことでしょう。「人権小国」日本です。

《ドイツの政治状況》

極右の AfD (Alternative für Deutschland) は結党して 2 年後の 2015 年に起きた難民の爆発的増加を契機にして支持を拡大させ始めました。以後、とりわけ東部ドイツでの台頭が著しく今年 9 月の州議会選挙ではチューリング州では第 1 党 (第 2 党の CDU<キリスト教民主同盟>との差は 9 ポイントもあります) になり、ザクセン州では第 2 党 (第 1 党の CDU との差はわずか 1 ポイント) でした。左翼党分裂からの「新左翼」BSW (ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟) は結党わずか 8 ヶ月でいずれの州でも第 3 党になりました。現連邦政府の「信号機 (赤・緑・黄色) 連立政権」の SPD (社会民主党)、緑の党、FDP (自由民主党) はいずれも大敗しました。ただブランデンブルグ州 (ベルリンを囲む) では SPD が第 1 党、わずかの差で AfD が第 2 党、BSW はこの州でも第 3 党に躍り出て、CDU は大敗しました。照井報告ではブランデンブルグ州政府は SPD と BSW の連立に向かうことになるのではと予想されています。東部 3 州の州議会選挙の驚くべき特徴は極右 AfD と「新左翼」BSW の躍進です。過日の日本の衆院選挙で「裏金」まみれ等を厳しく批判された自民党でしたが、それでも第 1 党を維持しました。驚くべき結果です。

照井報告は、東部ドイツで AfD が大きく躍進していることについて、旧東ドイツの「特殊性」として「二重の意味での『二級国民』」の扱いが、統一後 35 年が経過しましたが今もって存在しているとのことでした。かつてはソ連の「衛星国」、「植民地」としての「二級扱い」、統一後は「東の民衆も西マルクがもらえる」から「一級国民」への昇格という期待がありましたが「現在もなお二級国民」という意識が西部ドイツとの比較において東部ドイツ人に存在し、その捌け口が AfD に向かっているのではないかと照井さんは語りました。東・西ドイツの統一がなされたといっても、結局は西ドイツの資本によって、つまり西マルクによって急激に東ドイツを吸収し支配してしまった結果が、35 年の現在も引きずっていると私は受け止めました。その格差は深刻と思えます。

この点に関わって、照井さんが訳されたグレコール・ギジへのインタビュー記事の次の箇所が印象的です。記者からの東部ドイツ人と西部ドイツ人の亀裂に関する質問にギジは次のように答えています。

「一つのエピソードをお話ししましょう。ある時わたしは、わたしたちのドライバーの両親が住む、東部ドイツのとある村に行ったことがありました。彼の両親に、いま不足していると感じるものは何かと尋ねると、彼の母は、『コンズム [Konsum]』 (消費協同組合 [Konsumgenossenschaft])、居酒屋、農業生産協同組合 (LPG [Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft]) の集会、と答えてくれました。『コンズム』では、買い物のたびに女性たちが楽しいお喋りに花を咲かせ、居酒屋では、男たちが毎晩、ビールを 2 本ぐらい飲んで過ごすのがつねであり、LPG の集会では、終わると賑やかなダンス・パーティーが開かれていました。いまは、スーパーマーケットと居酒屋は 8 キロ先にあり、ダンス・パーティーも、もはや消えてしまいました。わたしが、隣人たちのパーティーとかに自分から押しかけて行くことはないのですか、と尋ねると、彼女は、『いえ、いまはそんなことをする人はいません。せいぜい大晦日だけです』と答えました。

わたしがこのエピソードで何を言いたかったと言いますと、要するに、ある種の事は、それらが無くなってはじめて、社会全体にとり、そしてまた特定の個人自身にとって、いかに重要なものであったかを知ることになる、ということです」 (「市民科学通信」53 号、20 ページ)。

※紹介【グレコール・ギジ】 (「ノイエ・チューリッシャー新聞」編集部)

「ドイツ民主共和国 (DDR) では、当時、最年少の弁護士であり、その後、左翼党の党首を務めるとともに、さまざまなトークショーでは常連のゲストであった。彼は、ドイツ連邦議会の最も優れた雄弁家としても知られ、その卓越した演説のゆえに、彼に敵対する陣営の人びとさえもが、それには喜んで耳を傾けるほどであった。彼の党である左翼党は、東部ドイツにおける最近の選挙結果に明らかなように、その未来は不確実なものとなっている」 (同上「通信」19 ページ)。

東西ドイツの統一とは何であったのか。この東独の「西独化」、つまり資本主義化、新自由主義化といった側面も見なければなりません。それは人間関係の変質、コミュニティの衰退でもあったのです。商品、貨幣、資本による人間関係への浸透、人間関係の解体であったのです。

次に、ドイツの現連邦政府の「信号機（赤・緑・黄色）連立政権」の凋落は何故起ったのか。照井報告ではインフレ、難民、戦費（ウクライナへ）の3つが取り上げられました。特に、日本円で数兆円単位のウクライナへの戦費とウクライナからの119万人の戦争難民の受け入れです。これ以外のシリア等からの移民・難民の受け入れは229万人です。この合わせて348万人という数値はドイツにおける日常生活（教育、福祉、医療等）に大きな影響（限度を超えた負担）となっていることは確かだと思います。連邦政府は、当初、ウクライナへの武器供与に慎重な姿勢でしたが、緑の党とFDPは積極派となり、緑の党は内部分裂も生じました。かつての緑の党の勢いも今は凋落の一途のようです。

AfDの台頭、「信号機（赤・緑・黄色）連立政権」の凋落、「新左翼」BSWの躍進、このドイツの政治状況は今後どのように展開するのか目が離せません。日本における長年の極右政権の支配、中間政党の右傾化、左翼の衰退という政治状況を考える上でも注目したいと思います。

では、ここから本題の「新左翼」BSWの躍進について考えたいと思います。なお、ここでの「新左翼」という言葉は左翼党から分裂して結党した新たな左翼と言う意味で用います。

《ザーラ・ヴァーゲンクネヒトという人》

照井さんが訳されたBSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）の共同党首であるザーラ・ヴァーゲンクネヒトへのインタビュー（ベルリン新聞）の内容を取り上げます（「市民科学通信」<以下「通信」>第52と53号）。訳出にあたって照井さんは以下のように述べています。

「『ベルリン新聞』（2024年8月24/25日）に掲載された、ザーラ・ヴァーゲンクネヒトとのインタビュー『和平を求めて運動することが、ロシアの代弁者などという誹謗の標的にされるなどという状況は、病気の沙汰です』（“Als Stimme Russlands diffamiert zu werden, weil man für Frieden wirbt, ist krank”）の翻訳である。ヴァーゲンクネヒトは、今年1月、ドイツの左翼党から分裂して結成された『ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟（Bündnis-Sahra-Wagenknecht、略称BSW）』の共同党首で、1969年の生まれ、すでに20代の頃からラディカルな言動で知られ、時として左翼党の内外で物議を醸す存在でありつつも、昨年2023年までは、左翼党の中心的なメンバーの一人であった」（「通信」第52号32ページ）。

また、インタビューを行ったベルリン新聞の記者はザーラ・ヴァーゲンクネヒトについて次のよう述べています。

「彼女は、東ドイツ出身の最も人気のある政治家であり、そしてまた、いま、ドイツの政治システムを根こそぎ引っ繰り返す途上にある。ザーラ・ヴァーゲンクネヒト、55歳、〔テューリンゲン州〕イエナにて出生、元左翼党幹部、現在は、彼女自身の名を掲げる政党の党首である。

本年1月に結成されたザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟（BSW）は、9月1日に行われるザクセン州とテューリンゲン州の州議会選挙の直前の世論調査では、SPD（ドイツ社会民主党）、左翼党、緑の党の三党を上回る支持率を得ている。すなわち、ザクセン州では約13%、テューリンゲン州では、AfD（〔ドイツのためのオルターナティブ〕、極右、30%）とCDU（〔キリスト教民主同盟〕、中道右派、21%）に次ぐ19%である。

こうした支持率からすれば、彼女の党は、たんにテューリンゲン州の州政府の連立政権に参加する見通しを持つのみならず、仮にCDUを越える得票率を得ることになれば、あるいは、エアフルトに次の州首相を擁立することも可能となるかも知れない。

以下のヴァーゲンクネヒト党首とのインタビューは、彼女がテューリンゲン州の選挙応援に向

かう途上の車中でなされた。(マクシミリアン・ベア/アニア・ライヒ) (「通信」第52号32ページ)。

「ドイツの政治システムを根こそぎ引っくり返す途上にある」ザーラ・ヴァーゲンクネヒトへの「ベルリン新聞」のインタビュー、その内容から私が興味深いと思える6点を紹介します。それにしても「政治システムを根こそぎ引っくり返す途上にある」というBSWへのドイツ市民の期待は大きいのであろう。日本の市民は左翼政党に何を期待しているのか。「日本の政治システムを根こそぎ引っくり返す」ことへの期待はあるのでしょうか。

「根こそぎ引っくり返す」とは何であるのか。以下でこのことを私なりに考えるためにインタビュー内容の紹介(整理)を試みます。

《ザーラ・ヴァーゲンクネヒトという「左翼のあり方」》

①オルターナティヴとは

かつて「オルターナティブの“もうひとつ”の意味は、単に選択肢をもうひとつおくことではない」(重本直利「AT(オルターナティブ・テクノロジー)論と現代管理論」『大阪経大論集』第202号、1991年、75ページ)と述べたことがあります。極右AfD(ドイツのためのオルターナティブ)とBSWのオルターナティブは相異します。ヴァーゲンクネヒトは次のように述べています。

「多くの西側諸国、そしてまたドイツにおいては、すでに何年にも渡って、支配的な政治が住民の願うものを無視し続けてきたということです。しかもそれは、きわめて多くの領域に妥当します——たとえば社会的な問題、格差社会の深刻化、外交・経済・移民・エネルギー政策といった広範な諸問題においてです。とくにその傾向が悲惨なのは、現在の『信号機連立政権』です。じっさいに行われている政治がみずからの利害と対立するものである場合には、さまざまなオルターナティブが希求されることになるのですが、既成諸政党における問題は、彼らがオルターナティブと言えるようなものを何一つ提起できないということです。じっさい、核心となるべき政治的諸問題についてCDUが言うことは、SPDと同じです」(「通信」52号34ページ)。

それ故、CDU、SPDと異なる極右の「ドイツのためのオルターナティブ」(AfD)が台頭したのです。だがBSWのオルターナティブは次のように述べられています。

「人びとが、自分たちの要求や問題が真剣に受け止められていることを実感できるような政治であり、さまざまな問題が解決される方向に向かうとともに、解決されぬままさらに別の問題が追加されて現れるなどということのない政治が行われるということです」(同上34ページ)。

このオルターナティブは「ドイツの政治システムを根こそぎ引っくり返す」ということなのです。問題は「根こそぎ引っくり返す」とはいったい何であるかです。

②メディアへの批判

「現在のドイツにおける言論の自由の制限は、リベラルな社会とはとうてい相容れぬものです。公共の合法的放送が、ただただ政権に都合のいい物語を発信する道具へと引きずり降ろされ、一面的な情報を放送することに汲々とする時には、人びとが、自分たちの広範な階層の立場や意図が示されないのであれば、いったい何のために受信料を払っているのか、という疑問を抱くのも当然です。わたし自身は、公共の合法的放送の存在を強く支持する者ですが、しかしそれは、広い範囲の民主主義的な論争を可能にするという、放送に委託された本来的な使命を忠実に遂行する場合であり、政権を代弁するスピーカーとしてのそれではありません」(同上34ページ)。

「広い範囲の民主主義的な論争を可能にする」という点が重要です。メディアの取り上げる範囲は狭いのです。そうした中、現実では何が進行しているのか。次のような事例を取り上げています。

「なにかの団体が『望ましくない』講演者を招待する時には、その団体への助成金が削減

されます。大学の場合には、研究者が『誤った』意見の持ち主であることが明らかになると、期限付きで契約は延長されないこととなります」（同上 34～35 ページ）。

こうした事例は日本でもよくあることです。「広い範囲の民主主義的な論争」には至っていません。そうした中、現実ではごく狭い範囲のカッコ付きの「民主主義的な論争」が行われているに過ぎないのです。

ひとつの事例として安全保障をめぐる論争について次のように述べています。

「ドイツへの〔2026 年から計画される〕アメリカの中距離ミサイルの配置についての論議に関しても、たとえば州政府が異議を唱え、このミサイル配置の持つ危険性を明確な形で公けの議論の俎上に乗せるならば、政治的な論議を変えていくことができるということです。このミサイルの配置は、わたしたちにとっては、ロシアの核ミサイルの射撃目標となることを意味します。これを阻止することこそは、わたしたちにとって絶対に必要なことです」（同上 36 ページ）。

沖縄本島を中心とした南西諸島における軍事基地の強化は、有事の際は相手側（想定されている敵国）からの攻撃目標となります。だが軍事基地の強化の絶対阻止を含めた「広い範囲の民主主義的な論争を可能にする」というメディアの役割発揮には至っていません。日本の地域自治体（沖縄県をはじめとした）が自衛隊および米軍基地を含めた軍事基地の強化（ミサイル配備計画、「核の傘」を含め）に異議を唱えることは、ドイツの州政府が異議を唱えることと同様でなければならないと思います。地域自治の本旨とは何か。日本のメディアも含め軍事基地の強化の「危険性を明確な形で公けの議論の俎上に乗せる」というオルターナティブが重要です。

③ドイツの外交の核とは

「わたしならば、まずはドイツが再び、外交と調停を代弁する存在として国際的に認められる存在となるべく、努力するだろうと思います。要するに、なにやら指図をするが如き顔で世界を練り歩くようなことはしない、ということです。かつて、ブランドや、あるいはまたゲンシャーのもとでは、外交と調停とがドイツの外交の核をなすものでした。そういう意味で、わたしならば、ロシアとウクライナとの間の交渉をできるだけ早く開始させるべく、ブラジルと中国と話し合いを持つように努力することでしょう。こういうことは、あるいはアメリカ大統領になるかも知れぬトランプのような連中に任してはならないことです。ヨーロッパにとっては、この戦争ができるだけ早く終結に向かうことは、まさしく死活の問題なのです」（「通信」53 号 10 ページ）。

ここでのオルターナティブとは、「ドイツが再び、外交と調停を代弁する存在として国際的に認められる存在となるべく」努力することであり、そのためには「ブラジルと中国と話し合いを持つように努力する」としています。戦争の終結はドイツおよびヨーロッパの死活問題なのです。ウクライナへの武器等の支援によるウクライナの軍事的優位を得ることがドイツおよびヨーロッパ、NATO の死活問題とは捉えていません。ここでも「広い範囲の民主主義的な論争を可能にする」ことが重要です。だが、東アジアでの軍事的優位（アメリカの「核の傘」を含む）を得ることが日本の死活問題という主張が日本の現政権の安全保障であり、かつこの考えが日本社会で支配的となりつつあります。

④BSW と AfD のオルターナティブの違い

「CDU と FDP の経済政策や社会政策は、AfD のそれと多くの点で一致します——軍備の拡張を求める主張もそうです。AfD は、NATO の『2%目標』に賛成の立場に立っており、もとより平和主義政党などではありません。中東の紛争についても、彼らは戦争推進の立場にあります」（同上 11 ページ）。

AfD は、CDU の経済政策・社会政策と多くの点で一致していると述べ、また NATO の「2%目標」に賛成、中東の紛争においても戦争推進の立場であり、AfD に「単なる選択肢」はあつて

もオルターナティブな政策は何ひとつありません。

移民・難民問題についての BSW と AfD の違いについて、ヴァーゲンクネヒトは「わたしたちは、移民・難民に対するルサンチマンを煽り立てるようなこととは無縁です。わたしたちが主張するのは、現在のようなドイツへの大量の移住者は、すでに限界を越えていること、したがって、なんらかの適用すべき規則が必要だということです。本来、庇護権 (Asylrecht) というのは、政治的に迫害されている人びとを庇護するためのものです。それは、誰もが入国でき、滞在することができる、ということの意味しているわけではありません。民族主義的な立場とは、もとよりまったく無関係です」(同上 11 ページ) と述べています。

⑤アイデンティティー政治

チューリンゲン州での公務員の職務における東部ドイツ人のクォータ制の導入に関わってのアイデンティティー政治に関する記者の質問にヴァーゲンクネヒトは次のように述べています。

「アイデンティティーを真剣にとらえることは重要な論点だとは考えています。しかし、現在、大都市のアカデミズム周辺で流行している woke な (人種的偏見に対して目を光らせる等) 議論には、いっさい、与するものではありません。そこでは、性的志向、血統、皮膚の色といったものが基本的な要因へと持ち上げられます。つまりは、社会的問題は消滅するのです。要するに、共通であるものではなく、分離されたものが、そこでは前面に出ることになります」(同上 12 ページ)。

アイデンティティー政治が社会的問題として捉えられず、「基本的要因」によって分離・分断されたものが前面に出ていることに警告を発しています。そこでは社会的問題の共通性が後景に追いやられる危険を指摘しています。例えば、日本社会における徴用工問題での戦争責任・戦後補償責任も社会的・歴史的問題が後景に追いやられ、民族あるいは国家のアイデンティティーという「基本的要因」によって分離・分断されています。アカデミズムおよびメディアでの議論も含めて「広い範囲の民主主義的な論争」を不可能にする日韓の分離・分断が前面に出ています。

⑥ガザの現状について

ヴァーゲンクネヒトはガザの現状について次のように述べています。

「平和と外交のために努力するという立場であれば、ガザ地区で非戦闘員の市民たちが虐殺される状況を許すことはできません。そこでイスラエルが行なっているのは、けっして防衛戦争などというものではなく、人びとに対する殲滅戦争にほかなりません」(同上 12~13 ページ)。

「そこでは学校や病院が爆撃されているのです。それこそは、非戦闘員の住民たちに対する残虐きわまる戦争です。キエフがガザと同じような状態に叩き込まれることを想像してみてください。そのさいには、ドイツにおいても、凄まじい絶望の絶叫が全土に響き渡ることでしょう。それは戦争犯罪であり、そのことは国連も指摘しています。そうした行為を正当化することは不可能です」(同上 13 ページ)。

このインタビューの最後に、ユダヤ人中央協議会総裁がヴァーゲンクネヒトを「イスラエルへの憎悪を駆り立てる煽動者」として非難していますという記者の質問に、ヴァーゲンクネヒトは毅然として次のように述べています。

「ユダヤ人中央協議会が、女性や子どもたちに対する残虐な戦争に対して、なんらかの批判的な言葉を発して然るべきではなかったか」。

ここにも、ドイツ社会における“ザーラ・ヴァーゲンクネヒトという「左翼のあり方」”が端的に表されています。

《最後に一極右と左翼のオルターナティブの違い》

先に述べました「オルターナティブの“もうひとつ”の意味は、単に選択肢をもうひとつおくことではない」の言葉に続けて、私は「それは、既存技術の批判としての相対化であり、

さらに既存技術そのものの変革とかかわるところの“もうひとつ”である。従って、AT論は、単に既存技術にかわる“もうひとつの技術”の提唱を狭く論じたのではない」と述べました。この「技術」を「政治」に置き換えてAP論（オルターナティブ・ポリティクス論）として考えたいと思います。このことを「技術変革の政治学」として著したD・ディクソンは次のように述べています。

「ATの重要性は、何かの問題にたいして出される特定の解決法にあるのではなく、その解決法によって表されるアプローチにあるのである。テクノロジーは、人間の必要と資源・資財に合うように設計されるべきであって、その逆であってはならない、というアプローチ、そして、現在のものとは根本的に異なった形のテクノロジーの発展が望ましいばかりか、必須のものでさえあるという認識にあるのである」（David Dickson、田窪雅文訳『オルターナティブ・テクノロジー—技術変革の政治学—』時事通信社、1980年、40ページ）。

これを言い換えれば、政治上のオルターナティブとは、「現在のものとは根本的に異なった形の政治の発展が望ましいばかりか、必須のものでさえあるという認識にある」のです。ヴァーゲンクネヒトは「信号機連立政権」およびCDUも含め「既成政党における問題は、彼らがオルターナティブと言えるようなものを何一つ提起できない」（「通信」52号34ページ）と述べ、またAfD（ドイツのための選択肢）の政策については、CDU（キリスト教民主同盟）の経済政策・社会政策と多くの点で一致しており、またNATOの「2%目標」に賛成、中東の紛争においても戦争推進の立場にあり、オルターナティブな政策は何ひとつないと述べます。さらに、こうしたAfDの「単なる選択肢」は「解決されぬままさらに別の問題が追加されて現れる」といった代物に過ぎないのです。このこと（オルターナティブの捉え方およびその内容）は「ドイツの政治状況」のみならず「日本の政治状況」の根本問題でもあるのです。

「市民科学通信」サロンで照井さんの報告から学んだこと・考えたことを、私なりの受け止め（覚え書き）として以上のように紹介（整理）してみました。「通信」で毎月興味深い原稿が多く掲載されています。こうしたサロンで執筆者から直接お話を聞き・話し合うことによって新たなイメージが湧き理解が深まるのではないかと思います。引き続きサロンを開催していきたいと思えます。照井さん、ありがとうございました。引き続きよろしくお願ひいたします。

（しげもと とうすい）



【インタビュー】 オスカー・ラフォンテーヌ (上)

(翻訳) 照井日出喜



オスカー・ラフォンテーヌ (ザーラ・ヴァーゲンクネヒト夫人と) www.n-tv.de

オスカー・ラフォンテーヌは、BSW (ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟) の思想的な先導者と目されている。このインタビューでは、彼の夫人であるザーラ・ヴァーゲンクネヒトについて、スターリンの愛唱歌について、そしてまた、アメリカ軍兵士による彼の父の射殺について、語っている。

【「ベルリン新聞」編集部】

原題: "Das sind durchsichtige Versuche, meine Frau herabzusetzen."

(「それこそは、わたしの妻を引きずり降ろそうとする、いかにも見え透いた試みです。」)

出典: 「ベルリン新聞」2024年10月26/27日

聞き手: マクシミリアン・ベア

アーニャ・ライヒ

オスカー・ラフォンテーヌ (Oskar Lafontaine)

1943年、西部ドイツのザールラント州、ザールルイ市出身。

1966年、SPD（ドイツ社会民主党）に入党。

1976～1985年、ザールブリュッケン市長。

1985～1998年、ザールラント州首相。

1990年の連邦議会選挙ではSPDの連邦首相候補。

1990年4月、遊説中、精神病の女性に喉を刺されて重体に陥る。

1995～1998年、SPD党首。

2005年、SPD左派によるWASG（「労働と社会的公正のための選挙によるオルターナティブ」）。

2005年、WASGは旧東ドイツのPDS（民主的社会主義党）と合同して左翼党を結成。2005年～2009年、グレゴール・ギジとともに連邦議会の左翼党会派団長。2007～2010年、同じくギジとともに左翼党共同党首。

2022年3月、左翼党を離党。

2024年初頭からBSW（ザーラ・ヴァーゲンクネヒト同盟）。

前々月号と前月号では、東ドイツ出身の左翼活動家であるザーラ・ヴァーゲンクネヒトとグレゴール・ギジのインタビューを取り上げたのを受けて、今月号では、西ドイツ出身のBSWの中心的な活動家の一人、オスカー・ラフォンテーヌのインタビューを訳出する。旧西ドイツのSPDおよびSPD左派の政治家として、80年代以降、彼はつねに野党勢力のトップの座にあって活動を展開してきたのであるが、ヴィリー・ブランドの弟子を自称する彼が、なにゆえ現在はBSWの主要なメンバーの一人なのか、および、BSWが現実の政治過程にどのように切り込もうとしているのか、このインタビューで改めて明らかにしている。 (記者)

オスカー・ラフォンテーヌはいま、夫人であり、BSWの共同党首の一人であるザーラ・ヴァーゲンクネヒトとともに住む、ザールラント州の小さな町メルツィヒ（人口約3万人）の“カフェー・ヨーブスト”で待っている。カフェーのメニューには、メロン・ショーレ〔メロンを炭酸水で割った飲み物〕、アペロール・スプリッツ〔食前酒用カクテルの一種〕、Sex-on-the-Beach-Cocktail〔ウォッカ・ベースのカクテルの一種〕が並んでいる。彼はカプチーノを注文し、「いま、お時間はありますか？」というわたしたちの質問に笑顔で答える——わたしたちの質問が、もし彼の神経を逆撫でするようなことになれば、その時は、それにわたしたちの方が気づくことになるでしょう、と。彼は81歳であるが、およそ悠々自適な退職者などではなく、その戦闘的な姿勢は、いまなお野党の指導者のそれであり続けている。時折り彼は、手元の携帯を覗き込む。ベルリンにいる夫人からのニュースが届くのを待つからである。

——ラフォンテーヌさん、このカフェーは、ランドルフ・ヨーブスト（Randolf Jobst、前BSWザールラント州委員会委員長）の名から命名されていますが、彼は、皆さんとは政治的な同行者であったにも関わらず、皆さん、およびBSWとは、現在は疎遠となっています。

政治的同行者というのは、いささか誇張した言い方です。

——その後、彼はいかなる存在だったのでしょうか？

時折り、わたしがこのカフェーに来ているだけです。

——ヨープストの語るところによれば、彼がBSWを離党したのは、BSWがAfD（極右政党：ドイツのためのオルターナティブ）と協力することがあるか否かについて、確たる返答を得ることができなかったから、とのことですが。

州の市町村議会において、AfDから出された動議をどのように扱うべきかということについて、さまざまに相異なる意見がありました。

——このことについてのラフォンテーヌさんの立場は、どのようなものでしょうか？

わたしは、ザッハリッヒに、動議の内容に即して議論すべきだと思っています。AfDは、軍備の拡大に賛成し、NATOの拡張にも同意している政党であり、それらは、われわれの党とは真っ向から対立する立場ではあります。しかしまた、ウクライナにおける和平交渉の必要性という点では、われわれと一致していてもいます。そして、そのことについては、わたしたちが現在、州の連立政権について交渉を重ねている諸政党の比例代表の最上位候補者たちとも一致を見ているところで、それはまた、東部ドイツの二人の州首相が、チューリンゲン州のCDU州委員長とともにFAZ（「フランクフルター・アルゲマイネ」新聞）に共同で寄稿した文書（訳注1）も示している通りです。

——ラフォンテーヌさんは、この寄稿が掲載されることをご存知でしたか？

いえ、知りませんでした。

——こうした寄稿の発表は、ヴァーゲクネヒト夫人の努力の成果ともとらえることはできるでしょうか？ ヴァーゲクネヒト夫人の目的は、ウクライナ戦争を州レヴェルの政治にも取り込むことでしたから。

これは確かに、二つの意味で成果と言えるものです。一つは、ウクライナ戦争を終結させるべき和平交渉をただちに開始することの必要性について、その議論がようやく端緒に就いたということであり、もう一つは、80年代に、ドイツに配置されることが計画され、それに対する大きな抗議運動が巻き起こったパーシング2がありましたが、それよりもさらに危険なミサイルをドイツに配置することに責任を持つことができるのか、ということについての議論が開始されたということです。新たに配置されるべきものは、警告時間を持たない攻撃用ミサイルです。これは、言うならば、相手の喉にナイフを突き付けて、これは平和的な行動だ、と言うようなものです。幸い、国防総省（ペンタゴン）の中にも、これが責任を持てるようなものではないことを認識した人びともいます。逆に、ドイツの政界とジャーナリズムの大半は、この配置に対して賛意を表しているのであり、彼らは、まったくもって正気を失っているのではないかと疑わざるを得ません。最近では、フリードリッヒ・メルツ（1955～。CDU〔キリスト教民主同盟〕。2022年以降、CDU党首、CDU-CSU〔キリスト教社会同盟〕連邦議会会派代表。）が、連邦議会で、空中発射巡航ミサイル「タウルス」をロシアの内部のさまざまな目標に向けて投入するよう、けしかけておりましたが、これこそは、実質的にロシアに宣戦を布告するようなものです。

——チューリングゲン、ザクセン、ブランデンブルクの各州では、州政権の確立に向けた話し合いが行なわれていますが、それについてはどのように情報を得ておられるのでしょうか？

わたしと妻は、もちろん、自宅で議論しています。わたしはまた、メディアを通して、情報を得ています。

——ある人びとは、実質的にはラフォンテーヌさんがBSWの背後におられると考えています。ボド・ラメロウ（Bodo Ramelow, 1956~, チューリングゲン州における2014年から2019年までの第一次、2020年から2024年までの第二次州内閣における左翼党の州首相。党の分裂によって、左翼党は州議会の第四党に転落する）は、“ザーラ・ヴァーゲンクネヒトの演説を聞くと、ラフォンテーヌが話すのを聞く思いがする”と言っています。

それこそは、わたしの妻を引きずり降ろそうとする、いかにも見え透いた試みです。

——多分、ラメロウは、要するにラフォンテーヌさんのことをあまりにも良く知っている、ということなのかも知れません。

これはよく理解できることですが、彼のこれまでの経歴からすれば、わたしの妻がチューリングゲンで彼よりも人気を博しているということは、明らかに彼の自尊心を傷つけることになるでしょう。

——あるBSWの同僚の方は、ラフォンテーヌさんがBSWの成立のうえで、思想的な草分けの役割を果たしておられると述べています。

BSWへの実質的な準備をなしたのは、もはや多くの人びとにとって彼らを代表するものではなく、わたしたちの競争相手である既成諸政党です。その一つは左翼党であり、この党は選挙を重ねる毎に票を減らして凋落していったのですが、それというのも、彼らは開かれた国境ということを目指し、無制限の難民・移民の受け入れに賛成の弁を振るってきたからです。しかし、今日、労働者の多数派はAfDに投票しています。これこそは壊滅的な失敗にほかなりません。要するに、労働者は現在、賃金、年金、社会福祉といったものにおいて、彼らの利益をいさかかも代表することのない政党を選んでいるということです。

——ラフォンテーヌさんは、ヴァーゲンクネヒト夫人とはどのように協力しておられるのでしょうか？

普通に、夫と妻が共働きであるようにです。

——夫と妻が協力して働いている、ということでしょうか？

少なくとも、そうあるべきでしょう。それとも、皆さんの場合には、それは妥当しないのでしょうか？

——ラフォンテーヌさんとヴァーゲンクネヒト夫人とは、以前は政治的な競争相手でした。

いえ、それは違います。

——お二人は以前、つねに同じ意見の持ち主だったのでしょうか？

かつて、わたしが左翼党と合同した時には、妻はある種の疑念を抱いていました——要するに、わたしがオラフ・ショルツ（Olaf Scholz、1958～、SPD。ドイツの国政における SPD 赤/緑の党/FDP 黄 [ドイツ自由民主党] の「信号機連立政権」はすでに崩壊しているが、少なくとも11月現在は、まだ連邦首相。）と同じような立場を取る人間ではないかと考えたからなのですが、しかしその後、彼女は、わたしたちはじっさいには多くの点で一致することに気づくことになりました。

——お二人の間で意見の一致を見ないようなテーマは、まったくないのでしょうか？

もしそうであるならば、それはまたなんとも退屈な話です。ただ、意見の相違がある場合には、わたしたちは自宅で議論することにしており、公けの場では行ないません。

——ゼレンスキーが連邦議会で演説をしましたが（2024年6月11日）、もしラフォンテーヌさんが連邦議会議員であられたとすれば、ヴァーゲクネヒト夫人と同じように、連邦議会から退席されたのでしょうか？

あの時、BSWの議員団は、議場から退席したわけではありません。はじめから議場には出席していませんでした。事態は、少し違います。そののち、BSWの議員団には、彼らがゼレンスキーの演説を聞かなかったという非難が向けられることになりました。しかし、もちろん、それは愚にもつかぬ非難であり、彼らは全員、その演説を注意深く聞いたのです。ただ、あの場に居合わせて拍手を送ることをしなかつただけです。もしわたしが議員だったとしたら、やはりその場には赴かぬように言ったことでしょう——ゼレンスキーは、予想されたように、ヨーロッパ全体を引きずり込むことになるような戦争を惹き起こしかねない諸要求を並べ立てたのですから。

——ところで、現在、ラフォンテーヌさんがつねに、“～の夫君”と言われることについては、どのように感じておられるでしょう？

なかなかに愉快的な気分させてくれます。まあ、それを題材にして、わたしは幾らでも小話を作ることができるほどです。

——ヴァーゲクネヒト夫人が登場されるインタビュー、ドキュメント、トークショーには、すべて目を通されるのでしょうか？

もちろん、多くのものには目を通しますが、全部ではありません。彼女はテレビに出演することも多いですから。

——ザーラ・ヴァーゲクネヒトの批判者たちも、彼女のテレビ出演が多いことに対してあれこれ非難がましいことを言っています。

それもまた一つのネガティブ・キャンペーンであり、そしてまた虚偽です。2023年には、彼女は最も頻繁にトークショーに招待されるメンバーでは、上から20番目にさえ入っていませんでした。ただし、今年は政党の創立ということもあり、上から5番目のなかには入っていますが。

——” への夫君”としてのラフォンテーヌさんの日常は、どのようなものでしょうか？

皆さんがこちらに来られる前は、新聞を読んでいました。昨日は、フランスの歴史家で人類学者でもあるエマニュエル・トッド（Emmanuel Todd、1951～）の所論について考えていました。彼は、ロシアの原料をドイツの技術から引き離すためにさまざまな戦争を行なうことが、アメリカの地球戦略上の一つであることを知る、数少ない人物の一人ですが、このことは、アメリカの戦略家であるジョージ・フリードマン（George Friedman、1949～）が、2015年の有名なシカゴ演説で明確に述べているところです。キッシンジャー（Henry Kissinger、1923～2023、ニクソンおよびフォード政権で国家安全保障問題担当大統領補佐官、国務長官）やブレジンスキー（Zbigniew Brzezinski、1928～2017、1966年から1968年までジョンソン大統領の大統領顧問、1977年から1981年までカーター政権時の第10代国家安全保障問題担当大統領補佐官）も、この見解を共有していました。トッドは、彼の新著である『西洋の敗北』（独訳は、” Der Westen im Niedergang: Ökonomie, Kultur und Religion im freien Fall” Oktober 2024）なかで、ノルドストリーム1の爆破事件（2022年9月26日、ロシアからドイツへ天然ガスを供給するパイプライン、ノルドストリーム1（NS-1）とノルドストリーム2（NS-2）が爆破された事件）について書いています。この事件こそは、アメリカ合衆国のドイツに対するある種の宣戦布告の如きものには違いないのであり、NATOの内部において、ある国家が他の国家を攻撃することになれば、その時にはどのように対処するのか、という問題を提起しています。

——ノルドストリーム爆破事件には、アメリカが関与しているとお考えですか？

皆さんは、そうはお考えになりませんか？ かつてジョー・バイデンは、われわれはこのパイプラインを破壊するだろうと、世界に向かって語っているではありませんか。

——ただ、「ウォール・ストリート・ジャーナル」やドイツのメディアの調査によれば、ウクライナがその背後で画策し、バイデンはその計画を知り、そしてそれを思いとどまるように忠告した、とのことですが。

わたしのようにすでに長く政治の世界に棲んでいる者にとっては、バイデンがそれを思いとどまるように忠告したということ、そのままに信ずることはできません。このような国家的陰謀の臭いの立ち籠める事件の場合には、秘密情報機関の「スポンサー」のもとで、意図的に真実から逸脱した物語の数々が書かれ、流されるものです。ウクライナがこの爆破計画に関わったということは、あり得ることでしょう。しかし、その場合に沸き起こる疑問は、なにゆえわれわれは、われわれの主要なエネルギー・パイプラインを破壊する国に、膨大な資金と武器（2023年の決定で、ドイツは120億ユーロ＝約2兆円弱の追加）を供与して支援しているのか、ということです。

——ヴァーゲンクネヒト夫人は、あの事件を「テロ攻撃」と呼んでおられました。

もちろん、そうです。もしウクライナが犯人であったとすれば、彼らは彼ら自身の基準における戦争犯罪を犯したことになります。

——ラフォンテーヌさんも、2001年9月11日（アメリカ同時多発テロ事件）は、アメリカみずから演出したものとする人びとに属されますか？

冗談をおっしゃってはいけません！

——かのノルドストリーム爆破事件について、ドナルド・トランプならば、バイデンが述べたようには語ることはなかったでしょう。トランプはまた、自分はプーチンとうまく折り合っていくことができる、と述べています。ラフォンテーヌさんの目からご覧になって、彼はよりましな大統領なのではないでしょうか？

トランプとハリスの双方の候補者とも、アメリカの戦争政策を持続させることとなります。トランプは、ガザ地区における戦争行為を支持しており、バイデンやハリスよりも、さらに強かにイスラエルの立場を主張しています。じっさい、アメリカは、ジミー・カーター（Jimmy Carter、1924～。民主党。1977～81年、アメリカの第39代大統領）後の時代において、世界史上、最も好戦的な国民であり、最近の30年間に251回もの軍事介入を行なっているほどです。

——この数字は、どこに根拠があるのでしょうか？

これは、アメリカ合衆国議会の学術部門が確認している数字です。

——ヴァーゲクネヒト夫人は、国際法違反であるアメリカの介入について、ドイツでは議論されることがない、と発言しておられます。これについては、どのような説明が可能でしょうか？

ドイツの政治やメディアに対して、アメリカはきわめて強い支配力を保持しています。ペンタゴンの宣伝は、きわめて大きな影響力を持っており、そして、毎日のように、まさしくオーウェル（George Orwell、1903～1950、《1984》の第3章を参照）の吐いた、たとえ嘘であっても、それが執拗に繰り返されれば真実になる、という言葉の正しさが実証されているのです。

——ところで、なぜラフォンテーヌさんは、西側の同じ世代の人びとは異なる考え方を持っておられるのでしょうか？

わたしと同じ世代には、政治状況についてわたしと同じように考える人びとは、けっして少ないわけではありません。わたしの学生時代に、キューバ危機がありました。しかし、そこへのソ連のミサイルの配置が、トルコへのアメリカのミサイル配置に対する反応であったということについては、いっさい、指摘されることはありませんでした。要するに、あたかも邪悪なロシア人たちが、カリブ海の島にさほどの理由もなくミサイルを配置したものの、アメリカの圧力を受けて、それを再び引き上げざるを得なかった、というのが如き外観を呈していました。しかし、時間の経過とともに明らかになったように、それは誤りでした。

——ラフォンテーヌさんは戦中のお生まれですが、お父様はアメリカ兵に射殺されました。このことは、ラフォンテーヌさんの生き方に影響を与えているのでしょうか？

わたしの父はドイツ国防軍の兵士で、1945年に戦死しました。わたしは1943年の生まれで、父は一度、家族のもとに戦地から帰還し、生涯に一度、わたしに会うことができました。しかしもとより、わたしには父について記憶はまったくありません。成長するにつれて、父がどういう状況で戦死したのか、疑問に思うようになり、そしてまた、第二次世界大戦の歴史そのものと取り組むことになりました。

——お父様の戦死について、どのようなことが明らかになったのでしょうか？

父は、疎開していたわたしたち家族のもとを訪ねようとして、その途上、オートバイを走らせていて射殺されました。

——そのことについて、ご家族の中で話されることはありましたでしょうか？

父の死の経緯について、わたしたちは長い間、知ることはありませんでした。何年か経って、それがわたしたちに知らされました。父がこの戦争で戦死したという事実は、わたしが戦争の反対者になったことの重要な理由をなしています。わたしは、ギュンター・アンダース（Günther Anders、1902～1992、ドイツ・オーストリアの哲学者、詩人、作家。1929～1937、ハンナ・アーレントと婚姻関係にあった）の思想に共鳴するところが多いのですが、彼は、人間は自分たちが何を作っているのか、もはや理解してはいない、と述べています。要するに、彼らは、自分たちが何をしているのか、知ってはいない、ということです。じっさい、わたしたちは、すでに幾度にも渡って、核戦争が勃発する直前にまでいたっているものであり、その限りにおいて、わたしにとっては、ロシアを標的とする西側の長距離ミサイルの使用（訳注2）をめぐる議論などというものは、およそ理解不可能なものでしかありません。わたしは時折り、政界とジャーナリズムにおける一連の戦争挑発者の連中は、核戦争をコンピューター・ゲームかなんぞのように考えているのではないか、という印象を拭い去ることができません。

——ラフォンテーヌさんは、ソ連やロシアに対して、同国人たちの多くよりもポジティブなイメージを抱いておられるように思われますが、この印象は正しいのでしょうか？

わたしは、わたしが議論を交える多くの人びとと同様、アメリカ文化とロシア文化の双方を愛しています。わたしはたとえば、スタインベックやヘミングウェイ、あるいはエドガー・アラン・ポーの熱心な読者であるとともに、ドストエフスキー、トルストイ、ブルガーコフ（1891～1940。スターリンの治世下、ほとんどつねに発禁と上演禁止の処分を受けながら、《巨匠とマルグリータ》や《犬の心臓》を書く）を愛読しています。

——先頃読んだところでは、ラフォンテーヌさんはスターリンの愛唱歌を歌うことができになるとのことですが。

ええ、ジョージアの民謡で、愛の歌です。わたしは何度もジョージアに出かけており、友人もたくさんおります。

——成長期にお父様がおられないという環境は、どのような影響を及ぼすことになったのでしょうか？ ある種の父親の代理のような方がおられたのでしょうか？

政治の世界においては、それはヴィリー・ブランド（Willy Brandt、1913～1993。1964～1987、SPD党首、1957～1966、西ベルリン市長、1966～69、連邦副首相、1969～1974、連邦首相）でした。もし彼が今日もなお連邦首相であったならば、ウクライナ戦争はなかったでしょう。

——ヴィリー・ブランドは、現在においてもSPDの一員だったのでしょうか？

現在のこのような状態のSPDであれば、わたしが強く確信するところでは、間違いなくそれ

はないでしょう。ただ、かつての左翼的な諸政党がその根底から変質を遂げたということ自体は、世界のあらゆる所で見ることのできるものです。アメリカにおいても、かつては、ジミー・カーターあるいはジョン・F・ケネディは、平和の実現のために努力する人物でした。今日においては、クリントンやバイデンといった人物からなる民主党は、共和党よりもさらに悪質なものになっています。以前、わたしがその党首であった当時のドイツ社会民主党は、平和、社会国家、そしてまた社会的に (sozial) 深く根差した環境政策をめざすものでした。しかし、いまは、軍事拡張をめざし、政治の手段としての戦争に賛意を表し、そして、平和をロシアに敵対するものとして構築しようとしています。これこそは、ブランドとバール (Egon Bahr, 1922~2015, ブランドの最も重要な側近) の信条とは真っ向から対立するものです。現在、われわれの社会国家は大幅に衰退しており、ヨーロッパでは最低水準の年金、きわめて低い最低賃金、そしてまたきわめて貧弱な失業保険を持つのみとなっています。環境政策では、緑の党から鼻先に押し付けられた諸計画を持っておりましたが、周知のように、これらは市民からは拒否されています。

——ラフォンテーヌさんにとって、称賛されるべきドイツの政治家は存在するのでしょうか？——
ヴァーゲンクネヒト夫人を除いてですが。

称賛ということとはいささか異なりますが、ブランド、シュミット (Helmut Schmidt, 1918~2015。SPD, 1974~1984年、連邦首相)、さらにはまた、ゲンシャー (Hans-Dietrich Genscher, 1927~2015。FDP [自由民主党]、1974~1992年、連邦副首相兼外務大臣) やフォン・ヴァイツゼッカー (Richard von Weizsäcker, 1920~2015。CDU [キリスト教民主同盟]、1981~84、西ベルリン市長、1984~1994、連邦大統領) といった人びとについては、きわめて高く評価しています。

——すべて過去の政治家たちですね。

そうです。しかし、ショルツ (Olaf Scholz, 1958~。SPD。「信号機連立政権」における連邦首相)、ハーベック (Robert Habeck, 1969~。緑の党、現連邦副首相兼経済環境保護大臣)、ベアボック (Annelina Baebok, 1980~。緑の党、現外務大臣)、あるいはリントナー (Christian Lindner, FDP 連邦委員長、2021~2024年11月まで連邦財務大臣。経済政策をめぐる意見の対立によってショルツ首相により罷免され、FDPは政権から離脱、内閣は閣内不一致によって瓦解する (訳注3)) といった現在の政治家については、称賛などという言葉はおよそ場違いな代物です。

——ラフォンテーヌさんは、80年代にホーネッカー (Erich Honecker, 1912~1994。1976~1989年、ドイツ民主共和国国家評議会議長、1971~1989年、ドイツ社会主義統一党書記長) に会っておられます。

はい、彼もまたザールラント州の出身でした。わたしたちは文化上の諸関係を作り上げ、スポーツ選手や青年たちの交流を実現させました。これは、そのあとに続く状況への重要な準備をなすものでした。こうした政策において、わたしは明らかにヴィリー・ブランドの弟子であり、要するに、わたしたちは、ベルリンの壁をいささかでも風通しのよいものにしようと望んだのです。

——ラフォンテーヌさんは、ベルリンの壁の崩壊を予想されましたか？

いいえ。わたしたちは、ソ連がそれを許するなどとは思ってもみませんでした。ゴルバチョフのなした大きな功績と言えますが、しかし、彼はその後、もはやドイツ人の行動を理解することができませんでした。ロシアに敵対する煽動がドイツで噴き上がるとともに、彼はドイツ人に裏切られたと感じたのです。

(訳注1) ブランデンブルク州の州首相ディートマー・ヴォイトケ (Dietmar Woidke、SPD)、ザクセン州の州首相ミヒャエル・クレッチュマー (Michael Kretschmer、CDU [キリスト教民主同盟])、テューリンゲン州のCDU州委員長マリオ・フォイクト (Mario Voigt) が、連名で「フランクフルター・アルゲマイネ」紙に寄稿した文書 ([Michael Kretschmer, Dietmar Woidke und Mario Voigt für mehr Ukraine-Diplomatie - DER SPIEGEL](#))。ウクライナ侵略戦争を終結させるためには、ドイツとEUとの強い同盟による外交が必要であることを説くが、これに対しては、東部ドイツの中心的な政治家たちの、ザーラ・ヴァーゲンクネヒトの前に膝を屈する危険な行為だという、激しい非難も巻き起こした ([Gastbeitrag - Der gefährliche Ukraine-Kniefall der Ost-Politiker vor Wagenknecht -eine Intervention](#))。

(訳注2) ウクライナは、アメリカとイギリスのロシアを標的とする長距離ミサイルの使用を切望していたが、最近にいたって、バイデンはその使用を容認し、ドイツ連邦政府の外務大臣ベアボック (緑の党) は、米政権の容認に対して歓迎の意を表した ([Ukraine: Annalena Baerbock begrüßt Erlaubnis zu Waffeneinsatz gegen Russland- DER SPIEGEL](#))。ロシアはバイデンに対し、「核戦争はクリスマスにも勃発するだろう」との脅迫を發した ([Atomkrieg zu Weihnachten möglich - Putin-Sprecher droht Biden nach seiner Raketenentscheidung](#))。周知のように、11月19日以降、ウクライナとロシアとの間での激しいミサイル攻撃の応酬が報道されている。

(訳注3) これに伴って、2025年の連邦議会選挙は、9月末予定から2月23日へ、7カ月前倒しされ、3か月後に実施されることになるが、BSWや左翼党のような小党にとっては、準備期間の実質的な著しい短縮は、財政的にも不利になるのではないかと予想されている。なお、連邦議会選挙に対する11月25日段階における世論調査の結果 (複数の結果を平均したもの) は以下の通りである。

| | |
|---------------------|-------------|
| CDU/CSU [キリスト教社会同盟] | 33.4% |
| AfD | 18.5% |
| SPD | 15.0% |
| 緑の党 | 11.6% |
| BSW | 6.0% |
| FDP | 4.0% |
| 左翼党 | 3.3% |

FDPが抜けた「信号機連立政権」では、SPDと緑の党を加えて26.6%に過ぎず、「少数与党」にしても悲惨な支持率である。左翼党は、依然として5%の足切り条項に抵触しており、これからギジたちを含めた党员たちの努力が重ねられることになるであろうが、議席獲得には困難が予想される。極右のAfDは、全国レベルでも20%に近づいており、その支持層は、単に東部ドイツのみならず、ドイツ全土において強固であるように見える。目立つのはBSWの支持率の低下であり、これは、ザクセン州では連立政権協議が決裂し、テューリンゲン州でも政権協議はやはり難航していることから、なんとなく「嫌気のさした」有権者が増えたことがその一因ではないかと言われている。ヴァーゲンクネヒトの原則的で強硬な姿勢が、いまのところやや裏目に出ているかのようである。

9月の3つの州議会選挙後の経緯については、「通信」の来月号で、多少、追跡する予定である。

(下) は次号
(てるい ひでき)

<眞島正臣さんへ>

S野英二さんの『ユングフラウの月』、 読みはじめました

ひとりごと

「市民科学通信」52号でのS野英二さんに関する投稿、私はとても懐かしく本棚の奥でほこりにまみれ色あせたS野さんの出版した数冊の本を探しだしました。私がS野さんに出合ったのは高校生の時の英語の授業、その日教師は授業はせず、『ユングフラウの月』を読んで下さいました。

その後、書店でみつけた『ユングフラウの月』創文社、初版1970年、『星の牧場』理論社、初版1967年、他、数冊を手に入れましたが、いつのまにか、本棚の奥へと。

今回、久し振りに、又、少しずつ読み返しています。

思い出させて下さった事に感謝します。

ありがとうございました。

(ひとりごと)



<グラフィティ・エッセイ＝元上司への手紙>

社会と建築の話—隈研吾への批判の是非—

眞島正臣

<おわび 前号掲載の建築家記載の訂正>

バイタリィ競う二人の現代建築家—安藤忠雄と隈研吾を考える—序論

原稿におきまして関西万博大屋根リングの建築家を隈研吾と紹介した件につきましておわび申し上げます。大阪・関西万博会場デザインプロデューサーで建築家の藤本壮介氏によりデザインされたものです。関西万博のシンボルとなる建築物であり、重要なモニュメントです。間違えてはならない人名の明記にミスをしました。今後気をつけます。

1, 関西万博の大屋根リング 350億円が問われている

前略 S藤さん、ご無沙汰いたしております。S藤さんは関西万博を観に行くプランをお持ちですか。現代建築家に関心を持ち、調査をしていたら、仲間から、隈研吾の作品が改修費3億円ということで、住民から怒りをぶっつけられているという話題を聴きました。それに追い打ちをかけるように関西万博に参加している建築家へ疑問の声が挙がっているという情報も話してくれました。前回、70年万博のときも開催に対する批判の声はありました。

70年万博の時代は、広告代理店M社におりました。前売り券発売のキャンペーン広告戦略のマーケティングと広告表現のプレゼンテーション仕事に取り組んだ次元から関わり、記憶に残る体験でした。クライアントでは、当時、合併されていなかったカメラのミノルタ社の依頼で、「迷い子パピリオン」などが採用され、話題でした。会社のベテランの仕事で、私が関わっていません。カナダのある州の広報を担当。社会人スタート数年を経てやる気充分でした。

今回の関西万博のテーマは、「人間の生命」だということで焦点が絞られています。発表時から<未知の情報>が得られると楽しみにしていました。

いきなりですが、デザインプロデューサーの藤本壮介氏が手掛けられた大屋根リングに対して建設意図を説明せよという発言が建築寒業界から出されたようです。S藤さんはどう思われますか。

調べてみると、「緊急シンポジウム＝大阪・関西万博の迷走と建築家の退廃」(2024.8.20. 建築家会館ホール)などのネット情報が検索されました。

<https://www.youtube.com/watch?v=WLKSqYb9GLc&t=3082s>

パネラーに登壇された建築家山本理顕氏が多くの疑問点を投げかけています。同じシンポジウムの場ではなく藤本壮介氏は、疑問に答える発言を機会あるごとに発信しておられるので、隈研吾の関西万博における仕事を紹介する前段に、二つの立場の違う領域からの質疑応答を要約し、一緒に考えたいと思います。

2, 山本理顕氏が万博の基本において公共性を問う理由と藤本壮介氏の弁明

①山本理顕氏のプロフィール

「山本理顕さんに米プリツカー賞 建築界のノーベル賞

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0UE05DE20V00C24A3000000/#:~:text>

選考委員会の委員長は「山本さんは公の場と私的空間の境界を巧妙にぼやけさせ、コミュニティーの活性化に貢献した」と功績を評価した。財団によると、中西部イリノイ州シカゴで今春に授賞式が行われ、山本さんは5月に記念講演する。代表作に「公立はこだて未来大学」「東雲キャナルコート CODAN」「横須賀美術館」「埼玉県立大学」などがある。韓国の集合住宅やスイスの空港も手がけた。日本芸術院賞など受賞多数。工学院大、横浜国立大大学院の教授や名古屋造形大学長を歴任した。著書に「新編住居論」「権力の空間/空間の権力」など。」

②藤本壮介氏のプロフィール

藤本 壮介 1971年〈昭和46年〉 -)は、日本の建築家。藤本壮介建築設計事務所主宰。東京大学特任准教授。日本建築大賞、JIA 新人賞など多数受賞。北海道上川郡東神楽町に生まれる^[1]。子ども時代、実家にあったアントニ・ガウディの写真集を見て衝撃を受ける。大学卒業後は一人で設計活動を行っていたが、2000年2月、青森県立美術館設計競技2位(優秀賞)を受賞し、建築家として認められた。2007年2月、「情緒障害児短期治療施設」(2006年竣工。北海道伊達市)で2007年度日本建築大賞を受賞^[2]。2021年、主導的に設計を手がけた白井屋ホテル(群馬県前橋市)が「National Geographic Traveller Hotel Awards 2021」に入選した。<https://ja.wikipedia.org/wik>

③山本理顕氏の関西万博に対する疑問と大屋根リングのコンセプト説明望む

「「リング」の整備に350億円かかるという話題が国会でとりあげられた頃からでした。リングは大量の木材を使いますが、どこから調達するのかなど。木材を使う場合、調達先の森の再生を助けることが大切です。どこから木材を持ってくるのか、調達先に迷惑がかかっていないのか、説明がありません。費用が上振れする中で、リングや会場計画も既に大混乱に巻き込まれていました。」

https://note.com/kyodonews_osaka/n/nd589f5255734

④夢洲でのIR会場と万博の同時推進は間違い。山本理顕氏の意見

「私は万博を開催する場所が間違っていると思います。カジノを中心とした総合型リゾート施設(IR)とセットでというのは、どうなのでしょう。賭博場は生活圏から切り離されている方が良いでしょう。ラスベガスがあるのは砂漠の真ん中です。一方で、万博は後利用も含めて住民の役立つように開催するのが理念です。性格の異なる二つのものを、同じ場所に造る。全く考えにくい計画です。」

https://note.com/kyodonews_osaka/n/nd589f5255734

⑤関西万博の中心プロデューサーは、誰なのかあいまい。山本理顕氏の意見

「今回の万博には安藤忠雄さん始め、何人もの著名人がシニアアドバイザーになっていて、プロデューサーも何人もいます。誰が責任者なのか分からない万博になっています。藤本さん一人が責任を背負っているようにも見えます。」

日本建築協会も誰も助けようとしなない。」

https://note.com/kyodonews_osaka/n/nd589f5255734

山本理顕氏の意見は、今年の夏頃のもので、マスコミには取り上げられない進捗途上の問題で、正論であろうが外部からは改善されているのかどうか洞察できない。私の仲間などは、頭から関心がなく、関西万博を心理的にボイコットしている。プロデューサー等が自治体の方を向いていて、顧客である市民の方を上から目線でみているからであろう。

⑥藤本壮介氏の弁明に焦点を当ててみる。万博に求めるものの変化を主張 なぜ大屋根リングをシンボルにしたかのコンセプトについて

(A) 多様性がつながり合い、世界がつくられる感覚を実現したい

「気候、風土、食べ物、歴史、文化、音楽、服、自然が違う国々がそれぞれユニークなものを持ち寄り、6か月間一緒にいます。世界がダイレクトにコミュニケーションを取るのはこの機会しかないのではないか。一中略一万博の意味合いは深まっています。日本と世界の人たちが未来を考える尊い場になる、そこに関することは素晴らしいと心底納得しました」

(山本理顕×藤本壮介 モデレーター＝五十嵐太郎、東浩紀 万博と建築——なにをなすべきか @RikenYamamoto @soufujimoto @taroigarashi @hazuma
<https://www.youtube.com/watch?v=yiVH7vK065o&t=109s>)

(B) 世界の多くの国が1か所に集まってきます

「司会者—会場のコンセプトは、誘致決定段階では「非中心」「離散」と揚げられました。これについては解釈しましたか。

藤本＝「トランプ大統領の登場などによって、世界中で「分断」がますます激しくなっていました。世界が集まる万博がこの分断に対して、どういう立場を取るかが重要だと思いました。その意味で「非中心」「離散」はどこかに中心があるのではなく、それぞれの国の人々が輝ける中心を持っているという意味で素晴らしい。それがバラバラになっただけでなく、たくさんの中心をつなげる方向性が良いのではないかと考えました。」

(山本理顕×藤本壮介 モデレーター＝五十嵐太郎、東浩紀 万博と建築——なにをなすべきか) @RikenYamamoto @soufujimoto @taroigarashi @hazuma
<https://www.youtube.com/watch?v=yiVH7vK065o&t=109s>

(C) 世界最大級の無駄遣いという批判も起きました

藤本＝「リングの整備には350億円かかります。「世界一高い日傘」、「世界最大級の無駄遣い」という批判も起きました。今回の会場整備費は、2005年の愛知万博をベースに規模の違いや物価の上昇を加味して積算されています。ロシアのウクライナ侵攻以降の物価上昇により、2023年に2350億円になりました。リングだけが注目されますが、全体額がある程度決まっている中で、さまざまな機能を集約しています。メインの動線、展望台、ショーの観覧席、水辺に突き出している部分は会場内を循環するバスの動線にもなります。適正な金額を守りながら、創意工夫をして特徴あるものを造ろうとしています。」

(山本理顕×藤本壮介 モデレーター＝五十嵐太郎、東浩紀 万博と建築——なにをな

すべきか) @RikenYamamoto @soufujimoto @taroigarashi @hazuma
<https://www.youtube.com/watch?v=yiVH7vK065o&t=109s>

費用に関してどこまで「適切」と言えるのか、執筆者個人で判断しかねる。

3、大屋根リングに関しては、東西建築の歴史を踏まえた円形建築で、わくわくする祝祭感覚を表現していると理解

前略 S藤様 関西万博会場の工事が少しずつ完成に向かっていきます。青年時代にデザインの勉強のために欧州旅行をされたS藤さんです。大屋根リングの円形というデザインはいかなる感想をお持ちでしょうか。印象批判で申訳ないが計画を公開された段階で、円形の中に世界から参加のパピリオンを配置するというのは、広がるイメージや解放感がないのではないかと感じていました。

職場では、引き出しの中を絶えず整頓され、机の上にはないも置かないという働き方を貫かれたS藤さんであれば、あくまですっきりとしたデザインの大屋根リングを肯定されるのではないのでしょうか。イタリアに古代から残る円形競技場をコロッセウムを思い浮かべますと、違和感のある造形ではありません。建材こそ法隆寺や清水寺の舞台を思わせる木造の組み合わせです。関西万博という世界のお祭りのシンボルなのだとすると、納得がきました。

正確な円形をアポロ的造形とすると、茶道の世界で美的追求で千利休が試みた茶器の「ひょうげもの」というようなくずした表象を好む私は、デオニソス的造形を良しとするこだわりがありすぎるのでしょうか。S藤さんはどう思われますか。私の学んでいた水墨画塾の展覧会へ来ていただき、私の絵を批評していただきました。軽やかなご指摘を感謝しておりました。批評の対象を関西万博のようなイベント造形に感想を述べるには、スケールが大きすぎますね。



完成すすむ関西万博会場の俯瞰画像。「空と海が広がる会場」
<https://www.expo2025.or.jp/overview/masterplan/>

4、関西万博における隈研吾のパピリオン造形の特徴

(1) 70年万博に対する隈研吾のリベンジによる建築

現代ビジネスの先端を担う企業のビルをいくつも手掛けて来た隈研吾の関西万博に対する姿勢を知り、驚きました。一連の木材を現代建築に使う行為を続けてきた活動宣言とも取れる発言をしています。70年万博の全面否定をしています。何故、スター建築家ばかりに発注するかという大向こうへ自己の姿勢を分かりやすく宣言しながら、建築に形を与えています。

「前回の大阪万博は1970年、僕が高校一年生の時でした。その時の感想をひと言で言えば「疲れた」(笑)。それは僕だけじゃなく、多くの人がそのように感じたのではないのでしょうか。その大きな理由としては、ツルツルピカピカした工業製品にあると思います。しかも炎天下となれば尚更です。

世界の新しいものを見ることが出来る万博は、当時の僕には憧れの世界でしたが、実際には想像とは異なるものが広がっていた。当時の僕は、無意識に工業製品に対する反感みたいなものを感じていたのかも知れません。同時にそこでの体験は、僕の建築人生の原点でとっています。そういった背景から今回の万博は、僕にとって高校生の時に訪れた万博へのリベンジのようなどころがあるのかもしれない。」(【インタビュー】隈研吾さんが万博に描く、建築と茅の未来)

https://www.asogreenstock.com/sougensaisei/blog/interview_kumakengo/

(2) 近代以前の人々の知恵のちをつむぐ茅葺屋根のパピリオン

「【インタビュー】隈研吾さんが万博に描く、建築と茅の未来」を読むと奇抜に見える茅葺屋根のパピリオンをなぜ立ち上げたのか理解できるような気がします。70年万博の「進歩と調和」というスローガンの真逆を表現しようとするかのようです。年代の違いを考えさせられます。この辺に関して、70年万博の影響を受け、肯定して来た私などは、70年万博との違いを隈研吾が明確されているのは、正しいと考えます。S藤さんは、どう考えられますか？

もう少し、インタビューに耳を傾けてみる。「一今回の万博で“茅”という素材を起用された意図や思いをお聞かせいただけますか？今、多くの現代人は人が自然とつながっている、自然をひとつの大きなサイクルで見ることを忘れてしまっています。その想像力の欠如こそ、人と自然の距離を遠ざけてしまった原因だと感じます。今回のパピリオンは単純に建物として見るのではなく、パピリオンを構成する素材にはそれぞれにふるさとがあって、そこには人と自然の営みやサイクルがあるところまで感じとってほしいです。さらにこのパピリオンは会期後に別の場所で再び茅葺きとして使われる過程まで織り込んだデザインにしました。そうした茅の転用可能性を象徴する葺き方として、アイヌの伝統的な手法である段葺きを採用しています。産業や工業の技術だけでなく、近代以前に人々が自然の中で培ってきた知恵や技術も含めて万博に集い、再び全国へと広がっていく流れを示すことで、循環する営みを体現したいと考えました。会場に訪れた人々には「屋根に使われてる茅は、再び全国各地の茅葺き建築に生かされる。リサイ

クルすることが前提でこういう形になっているんだよ」ということをメッセージとして、しっかりと発信することが重要だと思います。」（【インタビュー】隈研吾さんが万博に描く、建築と茅の未来）

https://www.asogreenstock.com/sougensaisei/blog/interview_kumakengo/

いのちをつむぐ（EARTH MART）」パビリオン外観イメージ ©EARTH MART / EXPO2025



私が注目するのは、茅葺屋根のパビリオンに対する隈研吾のコンセプト説明が納得できるもので、民俗的なビジュアル的な意外性、面白さもある点です。

①建築と自然の関係を見直す。②アイヌの伝統的な手法を利用している。③万博終了後は、材料の茅をリサイクルに使用するという。リングの大屋根を万博終了後にどのように対処するかという議論が起きました。現在、回答が出ていないのとは、真反対です。隈研吾の建築に負のイメージが生じたのは、「那珂川町馬頭広重美術館」の20数年を経た老朽化でした。木材を守る防腐剤が現在のように進化していなかったと隈研吾は説明しています。地元の市民感覚からすれば改修費用は3億円は、驚きでしょう。YouTube 情報において専門家は3億円は、妥当だと発言しています。この事件を教えてくれた友人達は、隈研吾が無責任な建築家だと決めつけました。今回の万博では、事件を跳ね返すように慎重な姿勢です。

（3）交流史と大海で＜脱建築＞めざすポルトガルの驚きのパビリオン



<https://www.yomiuri.co.jp/local/osaka/feature/C0069056/20241008-OYTAT50035/>

S 藤さん、私が興味を持つパビリオンの一つはポルトガル館のアイデアです。

建築の素材を意外なものを使い、大海原を表現するという驚きが期待されます。

「ポルトガルパビリオンのテーマは「Ocean: The Blue Dialogue」。約480年前に交流を始めた日本とポルトガルを結びつけた海に焦点を当てる。1998年のリスボン万博が、海をテーマに開かれたことも関係している。建物は、世界的建築家の隈研吾氏がデザインした。ボート用のロープを使い、海運の先進国としての歴史や、海洋研究の盛んな国柄を表現している。中2階の床の形状は波を表す。リサイクルした素材や再利用できる素材を多く使って建設する。来場者の心を奪うような傑作になること間違いなしだ。」

<https://www.yomiuri.co.jp/local/osaka/feature/C0069056/20241008-OYTAT50035/>

「2025年大阪・関西万博では「あたかも大海の一部が万博会場に持ち込まれたかのように錯覚するパビリオンを目指します」と隈研吾建築都市設計事務所は、コメントしています。

<https://www.yomiuri.co.jp/local/osaka/feature/C0069056/20241008-OYTAT50035/>

「設計チームの一人でポルトガル出身のトパ・リタさんによると「約1300平方メートルの建物上部からはさまざまな太さのロープが吊され、海の色グラデーションやダイナミックな波を表現します。このような既存の概念にとらわれないリズミカルなデ

ザインでパピリオンの『脱建築』に挑戦します。」

<https://www.yomiuri.co.jp/local/osaka/feature/C0069056/20241008-OYTAT50035/>

国際交流の祭典である関西万博において、造形アイデアのユニークさ、表現により驚きをもたらす建築手法です。ただ、パピリオン設計依頼主のコンセプトに対応する順応性からか自由自在ではない感じがします。万博におけるわかりやすい社会要求を意識したと思われる節があります。無事な答えを出した形であり、遜色はないのですが、万博の外での活動と比べると物足りないのです。公共性という縛りが邪魔をしているのでしょうか。

5, 結論＝関西万博の外での隈研吾の自由自在な建築事例



6,

S 藤さん、上記の建築写真は、原宿に建てられた公益社団法人日本アロマ環境協会（略称：AEAJ）の2021年竣工に撮影されたものです。

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000124.000005249.html>

最新の隈研吾作品の建築目的は次のように、紹介されています。

<マロマ>という癒しの分野を全く知らないのです。「隈研吾氏が設計した日本マロマ環境協会の新拠点が原宿にオープン＝国産ヒノキの規格材で組み上げた美しい組構造を、ガラスウォールで覆っている、内外観ともに特徴的な建築になっています。」

<https://mag.tecture.jp/culture/20230222-83682/>

S 藤様 インターネットに掲載されたユニークな外観の建築の内部が紹介されております。『新建築』などの建築雑誌をめくるようなときめきを感じられます。国家、行政、自治体が発注者の場合の予算も、コンセプトも違うのだが、隈研吾という建築家の変貌したかに、飛躍した表象を具現化しています。

関西万博へは、今後、会場へ行き、実物を見ないと評価はできない。しかしながら、比較するのも異次元の事例を取り上げ、ビジュアル画像のみで、隈研吾の力の入れようは、どうなっていたのか考えさせられました。

関西万博以外の世界で、魅力あふれる建築を創造していることで、つくづく才能のある建築家であるなと確認させてもらったしだいです。関西万博を实际体験することで、もういちど、機会あればお話し合いさせてください。

長い冗漫な建築談義をお許してください。

紅葉だよりも報道される季節となりました。風邪など引かれませんように。

ご自愛ください。

敬具

(まじま まさおみ)



【資料】

ヨーロッパにおける文化の危機的な現状

(翻訳) 照井日出喜

① イリス・ラウフェンベルクは、昨シーズンからのベルリン・ドイツ劇場（以下、DT [Deutsches Theater Berlin]）の芸術監督（劇場支配人）である。ここに訳出したのは、たんにベルリンのみならず、ヨーロッパ各地において芸術文化が見舞われている危機的な状況についての、DTの11月号のNewsletterにおける、観客層への彼女の報告（Intendantin Iris Laufenberg zum Kulturabbau in Europa）である。文化予算の削減といった問題とともに、現在の世界の全体的な政治状況との関連においても、芸術文化の領域が難しい局面と向き合わざるを得ない事態にあることが指摘されている。

② ベルリン・コーミッシェ・オーパーは、ベルリンにある3つのオペラハウスのなかの一つで、現在、数年をかけて、膨大な予算のもとに改修工事が行なわれている。ベルリン国立歌劇場やベルリン・ドイツ・オペラほどの規模の大きさはないが、それでも、（ほぼ10年前の資料であるが）2013/2014年の予算は約3.800万ユーロ（約63億円）、助成が約3.100万ユーロ（約51億円）、従業員数420名、年間観客動員数（2015年）約21万人という規模を持っている。ベルリン市州が計画している文化予算削減計画が、この歌劇場にどのような影響を及ぼすことになるか、市州政府との交渉経過を含めて、批判が展開されている（ベルリン・コーミッシェ・オーパーのHPに記載されているものを訳出）。

(記者)

① イリス・ラウフェンベルク（ベルリン・ドイツ劇場）の報告

2024/11/16 土曜日

ベルリン・ドイツ劇場の観客の皆さま

11月の最初の週末、私はリエージュ（ベルギー）で、半年置きに開催される、ヨーロッパの劇場ネットワークである European Theatre Convention (ETC)の会議に出席して参りました。DTは、長年にわたって、このネットワークの一員となっております。今回の会議では、芸術の自由と政治の影響力の行使というテーマについて、多くの議論が提起されました。多くのヨーロッパ諸国において、状況は一段と厳しさを増しており、それゆえ、つい先頃のアメリカ合衆国の選挙結果と、ベルリンにおいて迫りくる文化予算の削減という事態を前にして、会議で展開された議論、および幾つかの例について、皆さまに報告したく思っております。

スロヴァキアでは、この夏の間、多くの大きな芸術諸団体の芸術監督および芸術部門の主任たちが政府によって解雇されました。そのなかの一人が、国立劇場の芸術監督であったマテイ・ドルリツカ (Matej Drlička) です。彼に対しては、たとえば国際的芸術家たちとの共同制作を行なったことが

非難の槍玉に上がり、彼の地位は、政府に近い立場の文化マネージャーに取って代わられました。この文化マネージャーが行なった最初の職務行為は、チェコからのLGBTQIA+〔多様な性〕をテーマとする劇団の客演を、直前になって中止させることでした。この文化省もまた、最近の数カ月の間に同じような組織改編が行なわれ、多くの職員が解雇されました。この問題については、英文ですが、資料を添付させていただきます〔翻訳では省略〕。引き続いてなされた討論のなかで明らかになったのは、こうした政治的介入という図式は、近年、ポーランド、ハンガリー、イタリア、スロヴェニア、ジョージア等々においても行使されているという事実でした。

ブルガリアの国立劇場では、先週、ジョージ・バーナード・ショーの《英雄たち》（《Arms and the Man》〔『武器と人』〕）が、ジョン・マルコヴィッチの演出で初日を迎えることが計画されておりました。この戯曲は、1885年のブルガリア-セルビア戦争を題材に取ったものです。民族主義的で保守的なグループは、この芝居を、それが国際的な芸術家によって演出されることをも理由として、「ブルガリア民族を愚弄するもの」と見做すこととなります。彼らは、国立劇場の芸術監督とそのチームの解雇を要求し、芝居の初日の前後、および初日の後に続く晩に、劇場の前でデモを行ないました。彼らはさらに、芸術監督であるヴァシル・ヴァシレフと劇場の職員たちに対して暴力を振るうまでにいたりしました。芝居の初日は、ほとんどまったく観客のいない劇場で迎えることになりました——ジャーナリストと批評家のみが劇場に入ることが出来ましたが、一般の観客は、デモに参加する人びとに入場が妨害されたのです。ソフィアからの同僚たちが、状況をさらに詳細に書いておられますので、添付いたします〔翻訳では省略〕。新聞でも、この事件が取り上げられております。

わたしたちベルリン・ドイツ劇場は、ブラチスラヴァ、ソフィア、そして、芸術の自由に対する介入が行使されているヨーロッパのすべての地域における仲間たちに、心からの連帯の意を表するものです。

上の二つの例は——これらは、最近の数カ月における他の多くの類似した事例から取り上げられたものですが——、ヨーロッパにおける文化状況に関わる報告のプレゼンテーションによって補足され、社会的・文化的な脈絡のもとで捉えられてさらに展開されました。すなわち、その報告では、われわれの社会における文化と芸術の役割、（文化）政策によって手段として利用される状況、検閲と自己検閲といったテーマが取り上げられました。この報告の全容は、ダウンロードして読むことができます。

他方、この報告は、わたしたちを鼓舞する発想の数々も提供するものでもあります。次第に強化されつつある政治的な影響力に対して、芸術領域が如何に対峙していくべきか、という論点であり、すなわち、**連帯し、集団として、高い自覚を持ち、そしてなによりも、芸術という、それ自体が自立したものであることができ、かつ、自立したものであらねばならぬ手段を駆使して、対峙する**ということです。

この前の水曜日（11月13日）、わたしたちはベルリンで、予告されている文化予算の削減に反対する多くの仲間たちとともにデモを実行し、**反対の明確な意志表示**を行ないました。しかしまた、国外において惹き起こされている事例の数々も、民主主義と芸術（の自由）とが、いかに相互に密接に結びついているものであるか、あるいはむしろ、民主主義と芸術がいかに相互的に必要とし合うものであるかを、実証しております。皆さまのご支援に、心から感謝いたします。

イリス・ラウフェンベルク



2024年11月13日のベルリンにおける文化人たちのデモ
(ベルリーナー・アンサンブルのHPから)

②ベルリン・コーミッシェ・オーパーの抗議文

ベルリン市州政府の文化予算削減は、コーミッシェ・オーパーにとっては二重のカタストロフを意味する

「これまでの数週間および数カ月間にわたって、ベルリン市州政府とわたしたちとの意見交換のさいに出された、あらゆる好意的な論拠にも関わらず、ベルリンの文化全般、そしてまたとりわけベルリン・コーミッシェ・オーパーは、きわめて強度の節約を余儀なくされることとなります。計画されているのは、たんに2025年度のシーズンの進行に伴う9%の削減ということにとどまりません。それに加えて、ベーレン通りのわたしたちの本拠地であるオペラハウスの改修工事の中断ということがあります」——こう述べるのは、ベルリン・コーミッシェ・オーパーの共同芸術監督であるズザンネ・モーザーとフィリップ・ブレーキングである。

「それこそ一夜にして、これまで何年もの間、市州、設計担当者、コーミッシェ・オーパーとの協議の中で準備され、練り上げられてきたプランが破棄されました。しかもそれは、ベルリン市州の文化担当大臣であるジョー・チアロ（CDU [キリスト教民主同盟]）と、ベルリン市長であるカイ・ウェーグナー（CDU）との、改修工事の継続についてのきわめて明確にして公的な同意が存在したにも関わらずです。たしかに、それによってベルリン市州政府は問題を先送りはしたのですが、しかしもちろん、解決したわけではありません。2年間の工事の中断は、少なくとも

4年間の改修の完成の遅延を惹き起こすことになるのです。1000万ユーロが節約されることにはなりますが、しかしそれによって、2億5000万ユーロのさらなる出費を生ぜしめることになるのです。これこそは、スキヤングルでなくてなんでしょうか！」

ベルリン・コーミッシェ・オーパーは、ベルリンにおける最も重要な文化施設の一つである。東ドイツに生まれ、やがて、あらゆる国境を越えて、アクチュアルな性格を携え、すべての社会層に受け入れられる音楽劇場の世界的なモデルへと発展を遂げてきた。このオペラハウスは、相対的に低額な製作費によって現代にマッチしたオペラを創造するうえで、さまざまなインパルスを生じ続ける存在と見做されている。

「現在、わたしたちは、シラー劇場（現在は閉鎖されているが、本来は演劇専用の劇場）を用いて公演を続けておりますが、ここは、土地にせよ倉庫のキャパシティーにせよ限界があり、かつ、音楽専用の劇場にとっては音響効果という点での問題もありますから、一時的な解決方法として、短期間のみ使用するにふさわしい劇場です。こうした条件ということになると、シーズンにおける公演において、さらにまたレパートリーそのものにおいても、著しい制限が必要となってきます。この劇場で長期に渡って公演を続けることになれば、コーミッシェ・オーパーは、芸術上でも財政上でも疲弊するであろうことが予想され、つまりはその存続自体を危険に曝すことになるでしょう」というのが、ズザンネ・モーザーとフィリップ・ブレーキングの見解である。

「現在までのアクチュアルなプランニングに即したオペラハウスの建築こそは、逆に、唯一無二にして特別な性格を備えた文化の世界を持ち、人びとが生きるに値する場としての町ベルリンの将来への信頼を象徴するものにほかなりません」。

【訳者後記】

ドイツ劇場のラウフェンベルク芸術監督の発言にあるように、芸術と民主主義が相互に依存する関係にあることは、とりわけ芸術的啓蒙主義の業火をくぐり抜けた地域では、一応の証明が得られているかに見える。民主主義は、たんなる制度ではなく、それを支えるのは社会全体を対象とする社会意識としての正義感であり、かつ、洗練された寛容の精神であり、この二つが欠落した「民主主義」などは、所詮、悪臭を放つ幼稚な残骸であるに過ぎない。

ではあるのだが、じつのところ、すでに以前から膨大な借金を抱えるベルリン市州にあっては、ブレヒトの《三文オペラ》で吐かれる有名な一句、「まずは喰うこと、モラルはそれから」が、「まずは喰うこと、アートはそれから」という「現実」に重なり合うのを回避することができそうにない。

660億ユーロ（10兆5000億円超）の借財を抱えているとされるベルリン市州（[66 Milliarden Euro: Berlin hat so viele Schulden wie nie seit der Einheit 1990](#)）で、州政権（CDU+SPD）は、400億ユーロ弱（6兆4000億円）の総予算から30億ユーロ（4800億円）を削減する計画を立てており（[Das ist die Sparliste des Berliner Senats | rbb24](#)）、その範囲は、交通、教育、環境、等々、広範な領域に及ぶもので、文化芸術のみが狙い撃ちされているわけではない。文化芸術関連の削減は1億3000万ユーロであり、助成金全体の12%に当たっている。ドイツ劇場は3000万から300万、フォルクスビューネは2430万から200万、ベルリーナー・アンサンブルは2100万から175万、ベルリンの歌劇場財団は1億7000万から1500万ユーロ、それぞれ削減が求められている。しかし、とりわけ小規模な劇場（劇団）、フリーランスの集合する劇団などは、もとよりつねにぎりぎりの条件のもとで活動を展開しており、予算の削減による存続の危機が危惧されている。

（てるい ひでき）

新書散策の旅（シリーズ第18回）

…とりあえずやってみるか！

『実験の民主主義』から学ぶ…

宮崎 昭

このところ、「銃社会」アメリカの民主主義への疑問に始まって、私は、民主主義そのものへの関心がこれまで以上に高まっています。トランプが大統領に再選されて、その気持ちはより深く淀んだものになってきています。そのような心流にあって、次のような発言に少なからず考え込み、揺れ動いています。

たしかに保守のスタンスはある意味融通無碍ゆうずうむげで正解がない。やれることはやると割り切っているところがあります。それに比べて左派政党は「かくあらねばならない」という正解、つまり理念がある。そして、その正解や理念をどう国民に理解してもらおうか、という発想からなかなか抜けきれない。仮に国民に理解されない場合、国民が悪いとまでは言わないけれど、自分たちの答えが正しいことは譲らない。結局のところ、「わかっている」人たちのなかで閉じてしまう（宇野・若林[2023]134頁）。

この文章、トランプの「融通無碍」でも、ハリスの「正解」「理念」の対立を想定していたわけではないでしょうが、現在多くの民主主義国家が抱える対立の様相だと思えます。多種多様な意見、考えがあるなかで、みんな（とりあえず国民）の「民意」あるいは「総意」として纏め上げなければならないとき、多くの場合「多数決」でマジョリティが形成されます。しかし、そこで終わることもなく、マイノリティとの分断や遺恨を残すことが多くあります。民主主義が社会を切り刻み、「社会力」を腐蝕するということがあるとすれば、それは民主主義の「逆機能」であり、社会という存在が社会そのものの仕組みを打ち壊すという話です。

これまでも民主主義、とくに議会制民主主義の難点については多く語られてきました。たとえば民主主義の「形骸化」、形だけの民主主義という論難です。この点に関わって、早くから問題を受け止めて論点をいくつか提起している、宇野重規さん、若林 恵さんの“第三”の視点からする問題開示に学びたいと思えます。

論点は極めてスマートでクリアです。立法と行政のふたつの論座です。

フランス革命以来の「民主」という理念が立法の形式、つまり立法権の制度化に集約されてしまい、行政（執行）のあり方に民意が及ばないということです。立法と行政の乖離もしくは背離です。もちろん、立法の民主主義にも改善の余地があって放置するわけにはいかないのですが、それ以上に、つまり立法のシステムが「制度疲労」している以上に、いわば、行政の民主主義が貧困であるという、主張です。宇野重規さんは、ピエール・ロザンヴァロン『良き統治』を援用

されて、日本の首相も「大統領制化」して、首相官邸や閣僚会議の権限が拡大していることを指摘しています（宇野・若林[2023]125頁）。これまでも、国会審議をへることなく内閣府の決定で重要な事案が決定され施行されてきました。これはこれで大問題です。宇野さんはルソーを引き合いに、イギリス人は自由というけれど、それは選挙の日だけだと辛辣です。

選挙が終わればすぐ忘れてしまう。有権者のほうも選挙に行くだけでも面倒くさいので、終わった途端に「あとはよろしく」となってしまう。悪い言い方をすると、有権者のことをなめている政治家と、サボりたい有権者が手を組んだのが、いまの民主主義だとも言えてしまいます（129—130頁）。

つまり、選挙が終わると、日々の生活では政治に参加する機会も動機もなく、立法過程の国会審議を見守るだけで、立法化された法律がどのように執行されるのかは、官僚の手のなかでブラック・ボックスになって不透明になってしまうわけです。もちろん、この筋立ては国会の外での「参加」については度外視しています。反政府デモや集会などの市民による政治「参加」ですが、この日本では低調であるという報告があります。「…多くの先進国で投票率が減少傾向にあるのに対し、選挙に留まらない政治参加が増大しているということだった。これに、代表制を通じた民主主義に限界を見出し、それ以外の回路でもって、政治に影響を及ぼそうとする意識の表れといってもよい。しかし、日本では投票率のみならず、それ以外の政治参加も低調なままなのだ」（吉田[2021]56頁）。この日本の近辺でも、たとえばマルコス大統領（シニア、当時）を追放したフィリピンでの「ピープルパワー」の発露（柴田[2024]42—44頁）がありました。また韓国では、「韓国民主主義の伝統」とも言われてきた街頭での抗議活動（かつては流血だった）に代わって、反李明博政権デモや朴（クネ）元大統領を退陣に追い込んだ「ろうそくデモ」（参加者累計1700万人）が行われ世界的にも注目されました（文[2020]65—66頁）。

どんな政党が、誰が政権を担うのかということと、とりあえず脇に置いて、では立法での民主主義ではなく、行政の民主主義はいかにデザインできるのか、市民あるいは国民の参加はどのようにすれば実現できるのか、興味深々です。ひとつの参考事例として挙げられているのが、トクヴィルが高く評価したアメリカの「タウンシップ」です。「…まさに特別な知識や教養がない人たちが、『自由に授け合い』ながら、自分たちの課題を解決していく活動」（宇野・若林[2023]117—118頁）だということです。

イメージだけでいうのですが、このタウンシップは日本でいう「市井」（庶民）の集まりであり、「寄り合い」「井戸端会議」に近いものではないでしょうか。地域の課題を我が身に引き受けて議論し解決を模索するというモデルです。いわば、失われた前近代の知恵を復活させることです。こうして行政の在り方にも再検討が加えられ「官僚や公務員を人間に戻してあげる」（同上119頁）という展望が語られます。繰り返しになりますが、改めてまとめると、「…これまでの民主主義は、『承認の民主主義』であって、『行使の民主主義』がちゃんと問われてこなかった」ということであり、その反動として「…首相がまるで大統領のように振る舞うことが可能になってしまっていること」（同上121頁）が指弾されています。

さて、日本流の「寄り合い」に近いシステムとして紹介されているのが、「デジタル」であり「ファンダム」のルールです。宇野重規さんの「聞き手」として登場している若林恵さんは、次のように紹介しています。私にとって不案内のことなので、備忘のためもあって長めの引用になります。

2022年に『ファンダムエコノミー入門』という本を制作したのですが、これは「ファンダム」がデジタル時代のアソシエーションを考えるきっかけになるのではないかと感じたからです。日本では「推し活^{おかつ}」という言い方が一般的ですが、特定のアイドルやアニ

メ、ゲーム、映画などを熱心に応援するファンの集合体を英語で「ファンダム」と総称します。

そこで面白いのは、ファンがもはや一方的にコンテンツを消費するだけにとどまらず、自ら解説動画を創ったり、絵や小説や音源を二次創作したり、外国コンテンツであれば多言語字幕をつけたり、ファン同士でお金を持ち寄って応援広告を街中に提出したり、といったダイナミックな活動が行われていることです。ファン同士のコミュニティが成長し、かなりの規模の経済圏が生まれつつあります（同上 144-145 頁）。

アイドルやアニメの「推し活」を「ファンダム」と言い換えて、そこに現在のアソシエーションを見抜くという若林さんの洞察力に驚くばかりですが、他方では再選されたトランプや兵庫県知事の「熱烈」な支持者の動向にも驚かされました。政党活動をしている人たちやメディアに携わる人たちに一石も、二石も投じる事態が進行しているのでしょう。

若林さんは、私の疑念を晴らすためなのかどうか、念押しの説明を加えています。ファンダムは、「資本主義とはつかず離れずの立場にしながら、それとは別の原理」で動いており、つまり「一種の贈与交換」であり、「そこで行われる交換は、コミュニティへの貢献に対する感謝が強いわけ」だと言っています（同上 150 頁）。

この提言を受けて、宇野さんはファンダムと「行使の民主主義」（行政への市民参加）を結び付けて次のようにまとめています。

指導的な知識人が「これは良い」「これは悪い」と決めていくやり方ではない。

みんながお互いに授け合いながら学び合っていく空間を、「政治＝選挙」の外にどうやって作っていくことができるか。「行使の民主主義」とファンダムが重なり合うところにこそ、これからの民主主義の可能性があるので（同上 166 頁）。

真正面から受け止めています。権威ある専門家もしくはエリートの意見に従う一方向の議論ではなく、異なった意見や考え方を多数決によって便宜的に決するのではなく、互いに学び合いながら感謝の気持ちを抱き続けることが、アソシエーションの本領だと肝に据えています。若林さんのいう「一種の贈与交換」を宇野さんは「政治＝選挙」の外にあるべきアソシエーションと捉えているのです。

そのように理解できるのは、宇野さんがプラグマティズムに深く共鳴しているからです。日本の保守勢力だけでなく、左翼勢力にも厳しい目が向けられるのも、そこに基層があり容赦ないのです。それは、「あらかじめ存在している『民意』（ルソーの『一般意思』を意識しています—宮崎）なんていうものは存在しない。だから、みんな自分の力の及ぶ範囲内で何らかの実験をして、それに何の意味があるかについては、あとから考えればいい。このように考えるのがプラグマティズムです」（同上 187 頁）という説明に端的に示されています。

「あらかじめ存在している」と想定される「正義」とか「理念」というものを絶対的なものとするのではなく、賛否の意見があってもとりあえずやってみて、その結果を後から皆で考える、だから「結果」が当初の賛否を理由にした分断に導かないわけです。宇野さんは続けてこう言っています。

この考え方だと、「Do すること」に対しての敷居がものすごく下がる。さらに、誰かが何か魅力的なことをやれば、周りの人もそれにつられてやりたくなる。それが習慣として横につながって広がっていく。気づいてみれば、革命なんかやらなくても、「面白いね」の連鎖から社会の仕組みが変わっていく。プラグマティズムの思想を活用することで、ある意味で楽天的なストーリーを描くことが可能になりま

す。「何もできない人はいない」のです（同上 187 頁）。

高度な知識や崇高な使命感は不要だといいます。市井の人々が普段着で語り合う、そんな場面を想像します。先に例示したフィリピンの「ピープルパワー」や韓国の「ろうそくデモ」において、もしかしたら「Do すること」が「井戸端会議」で話し合われた結論だったのかもしれない。

しかし、「ファンダム」が新たな「市民運動」のモデルとなりうるのか、そこで形成されるアソシエーションが、SNS などを活用した「推し活」で無謀かつ破滅的なポピュリズムとなって現れることのないよう、願わずにはられません。

その点、宇野さんも「あとがき」で自省を込めたコメントを述べています。私も懐にかかえて見守りたいと思うのです。

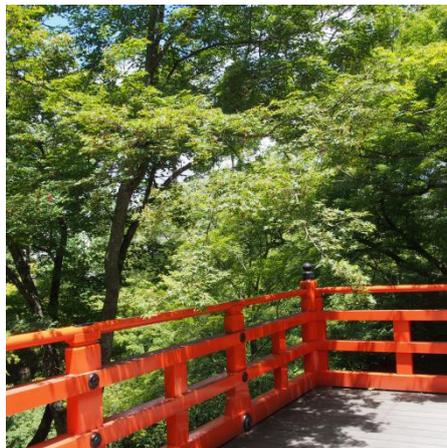
もちろん、現実にはトランプ現象に見られるように、特定のポピュリスト指導者を理屈抜きで熱狂的に支持する「ファンダム」が、いわば悪い意味で注目されているのが現在である。だからといって、ファンダムをポピュリスト指導者たちだけの道具にしておく理由はないだろう。むしろ、現代的なファンダムのなかから「21 世紀の政党」の新たなモデルを見出せないかというのが、本書のもうひとつの主張となる（同上 297 頁）。

とりあえずやってみるか！「21 世紀の政党」実験を。

（みやざき あきら）

【参考文献】

- 宇野重規・若林 恵[2023]『実験の民主主義 トクヴィルの思想からデジタル、ファンダムへ』中公新書
- 柴田直治[2024]『ルポフィリピンの民主主義—ピープルパワー革命からの 40 年』岩波新書
- 文京洙[2020]『文在寅時代の韓国—「弔い」の民主主義』岩波新書
- 吉田 徹[2021]『くじ引き民主主義 政治にイノベーションを引き起こす』光文社新書



< 備忘録 2 >

「コミュニケーション資本主義」、 そして「文化社会」への変容、その2

—GAFAの「文化」、似非能動性と一望監視的な装置—

重本冬水

今回は前号に続く「その2」とします。なお、以下での「 」付きの文章は中西報告のレジюмеで引用・紹介されている文章も含めています（以下、中西報告は「報告」と略記）。

< 欲望の資本主義から欲動の資本主義へ >

「報告」は「主体」について「われわれは、連合する見込みのない主体として、すなわち連帯を洩り、集合性に疑いを抱く主体としてつくり出されている」としています。それはGAFA（Google, Amazon, Facebook, Apple）といったソーシャルメディアが個人化された「参加型」のメディアとして機能しているからです。「報告」はさらに次のように述べています。

「実際、ソーシャルメディアを介したコミュニティ内の『私』と『みんな』の関係は、相互の関心の変化に応じて常に更新されるだろうし、空間内部の同調圧力が強い場合は、いつでも離脱可能な、流動的で一時的な性格を有している」。

このような関係性では「議論の落としどころを探れない他者」に翻弄されることになります。「議論の対象は何でもいい」のです。環境問題、経済問題、歴史認識問題などについて「全く異なる現状整理と分析を自信たっぷりに語る専門家やブロガーの群れ」、そこには「ハーバーマスが想定した規範的なコミュニケーションから逸脱し」、「ちょっとだけ世代が異なる、あるいは文化的背景が異なるだけで、もう全く会話ができなくなってしまう」のです。膨大な情報量はH・A・サイモンの言う「限定された合理性」（bounded rationality）すら成立しなくなります。何でもありの世界です。「報告」は以下のように結論づけています。

「人々のコミュニケーションは日常的に麻痺し、アーレントやハーバーマスの前提は現実には成立が難しくなっている」。

私たちが実際に属するコミュニティ内においても「私」と「みんな」の関係における規範的なコミュニケーションは日常的に麻痺し始めていると思えます。欲望と、それによる行為は、GAFAといったソーシャルメディアの中で、「再帰的に反復される行為そのものに喜びを見出してしまふ欲動へと転位」し、この反復に「快楽を感じる主体が生まれる」という事態に至ります。

「欲動は、拡大する自己再生産という際限のない循環運動に従事しようとする非人格的強迫である。……欲動の（真の）目的は、この循環そのものの際限のない継続である」。

この欲動の資本主義は資本運動の最終到達点なののでしょうか。GAFA万歳！、資本主義万歳！なののでしょうか。

< 相互受動性（インタパッシビリティ） >

「報告」は相互受動性を相互能動性（双方向性）の裏返しであるとし、相互能動性が主体と主体の双方向性とし、相互受動性は対象（客体）と対象（客体）の双方向性です。主体と主体の関係性が情報と情報の関係性（ソーシャルメディアあるいは情報システム）に置き換わ

り、能動的（主体的）な関係性が受動的（客体的）な関係性として機能するという事です。人間と人間の関係性が商品と商品との関係性からお金とお金の関係性に置き換わり、さらに情報と情報の関係性に置き換わるのです。

「報告」では「『小文字の他者』（個人）が他の『小文字の他者』と二人だけで話しているわけではない。そこには常に＜大文字の他者＞がいなければならない」と表現されています。「＜大文字の他者＞としての GAF A」が常に介在し、この二人（他者＝個人同士）の関係を支配する。だが、最も問題なのは受動性ではなく似非能動性であると「報告」は述べます。つまり、＜大文字の他者＞に支配されているにも関わらず相互能動性（双方向性）として認識され行動している事態が似非能動性です。現代はこの似非能動性が支配しているということです。「報告」は次のように述べています。

「インターネットの世界は、こうしたインタパッシヴな行為の連載に溢れている。それは、自らの経験を通じて満足する代わりに、誰か他の人が楽しんでいるのを観察することによって快楽を得ているのである」。

相互受動性（インタパッシビリティ）は似非能動性です。それはイデオロギーで考え・動くのではなく、「人々の間に交わされる身体的な経験を中心とする情動」によって考え・動くのです。「報告」は次のように述べています。

「GAF A のようなトランスナショナルなメディア産業が提供するプラットフォームは、『情動の共同体』を形成する。・・・情動の共同体は、インタパッシヴな主体がメディアとデータベースのフローの中で徹底的に断片化され、その情動の多くも『いいね！』ボタンやリツイート機能によってマーケティング活動に補足されてしまっている」。

<装置としての GAF A>

「一望監視的な装置の役割を担う」GAF A は利用者に寄り添い、「受動的に受け取れる選択肢」まで提示してくれるなど徹底して「やさしい」のです。だが、この「GAF A のやさしさ」の本質は「生-権力」という「安全装置」なのです。「自然の生」、「自然の身体」が「権力の計算の対象となった」のです。近代においては、「殺す権力」・「死への権力」ではなく「生への権力」・「生かす権力」へと転換した。そこでは、法メカニズム、規律メカニズムから安全のメカニズムへと移行するのです。

「安全装置は第1に、具体的な現象を集合として把握する。第2にそれを統計学的手法により計算する。第3に計算結果が、基準として設定される」。

私には例えば、放射性廃棄物（ゴミ）の海洋放出の「科学的基準」なるものが浮かびます。この基準以下であれば安全ですと。さらにこれは「科学的」というのです。そして放射能ゴミ海洋放出反対は「非科学的」と批判されるのです。

「報告」では、私たちは「環境を管理する『生-権力』の調整を自覚なく」受け入れ、「私たちはその基準の内側にいる」ことで安心するのです。身近な「ヘルスケア・アプリケーション」も同様です。

「私たちはその下で、自らを基準に合致させるよう努力し続ける主体となる。安全装置が出力した＜基準＞が、発動の局面で＜規律＞のように機能しているのである」。

「ポスト・ビッグデータとでも呼ぶべき時代においてプラットフォームが実現しているのは、安全装置が出力した基準を、規律のように発動させる作用である」。

「生権力＝生への権力」は、「死という否定的な事態への脅迫に基づく死への権力」に対し、「生という肯定的な事態への配慮に基づく権力」と言えますが、この「生権力」の恐ろしさはどこにあるのでしょうか。「死への権力」と「生への権力」は表裏の関係にあるのではないかと。

<次号に続く>

(しげもと とうすい)

私人が発展すればするほど、 個体形成の条件が成熟する

竹内 真澄

マルクスの社会科学の要点は、「私人が個体の条件を作る」という短いフレーズに要約できる。なぜなら、近代とは、発端において私人がつくる社会である。私人は必ず資本を生み出す。資本は、労働者を個別的労働者とするから、労働者を特殊な私人とする。だが、まさにこのことが労働をコンビネーション化させるので、急速な生産諸力の発展がもたらされる。「資本の生産力」は、個体の能力を破壊するようなかたちで、すなわちなんらかの職業に従属したいびつな人間をつくるようなかたちでのみ、生産諸力を発展させる。もともと、人間には様々な可能性がある。自然の中を走り回ったり、火をおこしたり、絵を描いたり、歌ったり、物真似をしたり、身体を柔らかく曲げたりできる。ところが、これらの潜在的な可能性の中から一芸だけをひきだして、もっぱらそれに専念させるのが私人化である。潜在的な可能性を封印して、ある一面だけを引き出すのはコストが安いからだ。

現代の「豊かさ」は、実は個性性を破壊することで得られた生産諸力なのであって、人類はこれを宿命であるかのように諦めてきた。だが生産諸力は高いかもしれないが、人類はその「高さ」にふりまわされ、自分が私人化されてしまっていることにますます気づくようになってきている。

たとえば、子どもの世界で、勉強の仕方がわからない子が良くできる子に教を乞うと、「企業秘密です」と返されたという。また、学者が研究会で未発表のアイデアを惜しみなく開示すると先に論文化されて損をするからあえて隠すという。こういうふうには、子どもであろうが大人であろうが、腹に一物を残して人とつきあいが習性のようにになっている。なぜ、こんなことが起こるかという、人が私人化しているからである。

資本は、私人化した人々を上手に結合して資本の生産力を高めていかねばならない。隠しつつ見せ、見せつつ隠す。打ち解けて肩を組むか、それとも、距離を取って他人行儀につきあうか、いつも人は悩んでいる。資本は、私人化を基本的に推進する。なぜならば、よくできる奴とできない奴を競い合わせるのが人事の要点であるから。しかし同時に私人化の小さい障壁（たとえばぎすぎすした感情的なもつれ、疑心暗鬼の人間関係）を取り払わなくてはチーム作業（コンビネーション）を達成することはできない。

人々がコンビネーションの内部にある限り、人々は団結しない。だが、資本の生産力はきわめ

て高いにもかかわらず、ではなく、高いがゆえに、人々はその質と量から被害を受けている。戦争、環境破壊、格差、人間的・自然の破壊はすべて資本の高い殺傷力の賜物である。

とてつもない生産諸力がもたらしたのは、一切の人間的なもの、いのち、自然の破壊である。G7だろうが、G20だろうが、何もできないじゃないか。これ以上にアイロニカルなことが他に
あるだろうか。

「生み出す力」が「壊す力」であるということ、これが人間を苦しめている以上、人はそれを考える。もし農民が日本の食料自給率を上げていこうとか、マスコミ労働者が表現と報道の自由を守ろうとか、おしなべて働く者たちが社会的分業を総体としてより「人間的な」理想に合致するようにしようと思えることができるならば、つまり「自分のことは自分で決める」だけでなく「自分たちのことは自分たちで決める」ということを真実にすることができるならば、コンビネーションをアソシエーションに転換することができる。なぜなら、アソシエーションというのは、「我々の中の我」「我の中の我々」を実現する、人類が求めてきた唯一の組織形態だからである。

上のような観点をひとたび獲得できると、人は既成の学問を批判的に検討できるようになる。たとえば、国際政治学者は一見立派に見えるが、「世界の市民 citizen of the world」を認めても、「世界市民 worldcitizen」を認めない。というのも、もし認めてしまうと「国際関係」がなくなり、飯の食い上げになるからだ。経済学者は人間が「ホモ・エコノミクス」であると繰り返す。しかし、ある人が解明したように、アダム・スミスが『国富論』を書いた時、誰が彼の食事を作ったか、食事をつくる理由は果たして「利己心」であったのか、ということを経済学者は問わないのだ。また、社会学者は、自分が政治学者でもなく、経済学者でもない独自性を誇っているが、人が私人であり、かつまた規範をあわせもつという奇妙な人間観を自分の混乱であるとは認めがらない。このようなことは、社会科学のみならず、自然科学や人文科学にもはびこっている盲点のなかのほんのありふれた事例である。

既成の学問をよく観察し、そこに何か目に見えないガラスの天井があることに気づいていくことと、「資本の生産力」がコンビネーションであるから、これを人間的なアソシエーションへ切り替える必要があることは、私人が個体を作るという「テーゼ」の二側面なのだ。

(たけうち ますみ)

むつつり助平

竹内 真澄

与謝野晶子の歌に「柔肌の熱き血汐にふれもみで悲しからずや道を説く君」（『乱れ髪』1901）がある。晶子の視線は、自分の性欲に答えてくれない男のくそ真面目に向いている。けれども、男の側から見た場合、道を説くのはなぜ、何のためであるのかという問題が残る。ぼくの推論では、この男はむつつり助平である。男には下心がある。道を説いて、晶子に尊敬してもらいたいというエゴである。本当は晶子が欲しいのだが、それを明け透けに言うと晶子に嫌われそうと言えない。そのため、自分でもたいして説得力があるようにも思えない「道」を説くのだ。これが、日清・日露戦争の間だったことを重視すると、男はお国のために命を捧げるのがぼくの使命ですとか演説したのかも知れない。だとしても偽君子であることは動かない。

フロイトの汎性欲説に立つわけではないが、一生懸命ギターの練習をしたり、芸人になろうと志したり、ちょっと本を読んで知ったかぶりしたり、人がやたらに向上したがるのは一体なぜであろうか。全部とは言わないが、おおかたはモテたいからではないだろうか。

森鷗外の「キタセクスアリス」1909、室生犀星の「性に目覚める頃」1919、谷崎潤一郎「痴人の愛」1925など、いずれも自己の内なる「性」を解剖した記録だ。人物として作者が「助平」か「むつつり助平」かは知らぬ。人間とは、男だろうが女だろうがLGBTQだろうが、助平かむつつり助平のいずれかだというのが僕の説だ。ともあれ、日本の作家たちは人間とは何か、という問いとこれらの作品を不可分なものと考えたに違いない。

最近、ぼくは学生に「人間には二種類しかいない。助平かむつつり助平かだ。で、君はどっちかな」と尋ねて笑わせている。どうして笑うのか？それは、この問題がかなり本質的な問題を含んでいるからではないだろうか。笑う学生は、まだぼくにこう切り返してはこない。「では先生はモテたいから学者なのですか」。あっはっは。やはり笑うしかない。

（たけうち ますみ）

農本主義のなれの果て

一進歩にとっての障害者を封じこめる手だて

(一)



何でも欲しい物を欲しいだけ買えると思込んでいるフツウの消費者が加害者
—保守的な思想・意識が次の時代を切り開く質をもつには!—

青野 豊一

家の光協会『「農業を株式会社化する」という無理 これからの農業論』に、宇根豊氏は「農本主義が再発見されたワケ」という題で、以下のように書き始めている。

I 問題の所在 宇根氏のいう「農本主義」とは!

1 農作業には、人を酔わせるものがある!

宇根氏はこの「農本主義が再発見されたワケ」の中で、次のように言う。「田んぼの稲とか、畑の野菜には、それに向き合っていると「嬉しい。仕事がしたい」と自然に思わせる力があります。私たち百姓の仕事というのは、相手の生き物(作物など)の要請に応じてやっているような気持ちで田畑に通うところがあります。」「・・・天地有情の中での仕事の心地よさというか、嬉しさというものが、知らないうちに自分を支えてくれているわけです。」

これは、私にとっても、大変納得のできる話である。農作業には、人を酔わせるものがある。自然を相手に、自分で計画し、自らの身体を使って労働する。このことを私なりに解釈すると、アーレントのいう「labor 労働」と「work 仕事」の両方の要素があると言えよう。

*アーレントは人間のしていることを、労働 labor、仕事 work、活動 action に分類した。彼女は『人間の条件』のなかで、マルクスとの鋭い対立を意識しながら書いている。マルクスの人間観の基礎には労働を人間の本質とみなしているが、彼女はそれを否定して、労働は人間の本質どころか、人間の諸活動のうちもっとも程度の低いもの、自由な人間ではなく奴隷が従事するのに相応しいもののように認識しているようだ。これに対して、マルクスは、労働を人間を「類的存在」としている最も本質的な要素としている。人間は自然界に対して労働を通じて働きかけることによって、自然の中に人間的な世界を作り上げていく。また人間は共同的な労働過程を通じて他の人たちと連帯を結び、そのことによって社会的な動物として自分たちを作り上げていく。どの側面においても労働は人間を人間たらしめる最も本質的な要素であり、その意味では、神ではなく労働が人間を作ったともいえると考えた。

しかし、こうしたマルクスの考え方をアーレントは否定した。「神ではなく労働こそ人間を作ったとか、理性ではなく労働こそ人間を他の動物から区別するというようなマルクスの冒流的な観念」と書いている。

*「人間の条件」志水速雄訳 ちくま学芸文庫 以下の引用も、この本からしている。

このどちらが正しいとは簡単には言い難いが、アーレントは人間の思考と行動を考えていく場合の三類型を提供したことはそれなりの意味があるとは思いますが、私としては、彼女は労働と仕事をことさらに区別したように思える。そして労働は生命の再生産のために必要な消費を目的になされる活動と定義し、仕事の方は人間世界を成り立たせているさまざまなものを生産するものと定義づけた。労働はなされた後に何も残さない、消費されることだけを目的とした活動だとしている。「労働が生産するものは、すべて、人間の生命過程の中でほとんど即座に消費されるためのものであり、この消費は、生命過程を生産しつつ、肉体をさらに維持するのに必要な「労働力」を生産—むしろ再生産—する。」

「人間の条件」

しかしマルクスの「労働」は、このような意味ではない。マルクスのいう労働とは、自然への働きかけとしての技術的な過程と、協働や分業といった人間相互の組織的な過程から成り立っている。そして技術的過程のうちには生産手段の生産などアーレントが労働ではなく仕事に分類したものも含まれており、組織的過程のうちには精神的労働が含まれている。つまり、労働とは人間のあらゆる活動領域を含んでいるのである。だから、マルクスの言う労働とアーレントの言う労働とが同じ概念ではない。アーレントは、マルクス思想を捉え違えているようだ。だが、人間の諸活動を細かく観ていくことには、それなりの利用価値があろう。

アーレントの分類を再整理すれば、仕事 work とは人間存在の非自然性に対応する活動力である。人間存在は、種の繰り返している生命循環に盲目的に付き従わないし、人間が死すべき存在だという事実はこの生命循環ということを理性的に理解しても、完全に納得でき得るものでもない。仕事はこのような人間存在の「非自然性」に基づいて、自然条件・環境と際立って異なる「人工的」世界を作り出すものであるとしている。そこで、仕事の人間の条件としては、どうしても意味を問われることになる。言わば、世界性を内包しているものと言えよう。

こう整理すると、農業にはアーレントの言う「労働 labor」と「work 仕事」の両方の要素があると言えよう。さらに、「work 仕事」としての農作業事には美意識*が伴っている。農作業では、この美意識がどうしても動き出す。竹林の整備をしても、一本の竹を伐採するにも、田の畔草を刈り取りにも美意識が起動している。一つの作業にも、収穫時にも、それなりのイメージを抱いて働いている。

*これは、カントの言う利害関心と無関係な美意識ではなくして、付随的な美と言えよう。農民の美意識については、最後の補説「農民の美意識について」を参照ください。

シモーヌ・ヴェイユは『根を持つこと』という著作の中で労働者と農民の「根こぎ」について述べているが、ヴェイユが実際に体験した労働者たちと農民たちの二者の働きの在り方は大きく異なる。そして、自分なりの美意識をはっきりと起動させて働いているのが農民であるとしている。農作業には、「労働 labor」と「work 仕事」の両方の要素がある。しかし、「市場における商品交換」主導の社会では日々の農作業は報われることがあまりなく、この美意識も感度が鈍ってしまっていることが多い。

*労働者たちも美意識を駆動させて働いているが、その裁量度は農民たちに比べてはなはだ低い。日々の労働が分業に組み込まれ、機械が改良されればされるほど、彼等の存在意義は小さくなる。このことは現状ではどうにもならないことである。もしプロレタリア独裁国家による法的な規制をしても、このことがなくなることはなからう。手工業の熟練は整備された機械に変わり、精神はもはや労働者の中にはなくなり、機械の中にあるとでも言い得る状況になる。このような状態は、いくら賃上げしても改善されることはない。賃労働という労働形態がなくなる限り、…。企業の経営に参加する能力の獲得がなされない限り、…。

2 「農業は資本主義とは相容れない」

宇根氏は、さらに続けて次のように述べている。

「近年、農業の語りが仕事の結果としての生産物の価値、それも経済価値に偏りすぎているような気がします。…なぜこうなってしまったのか、どうにか別の道は見つからないものだろうか、と考え続けてきました。」

「…農本主義者の眼力で、ものすごいところは「農業は資本主義とは相容れない」という発見です。今の日本の農業が抱える問題点の多くが、この相容れなさを原因としているものだと私は考えています。…たとえば、企業は赤字部門はすぐに撤退いくでしょう。…しかし…百姓の場合は、自分を支えているのが経済とは違うものだから、言ってみれば赤字になっても頑張り続けるのです。」

「…半分は資本主義に乗っかってやってもいいかもしれないけれど、もう半分は市場から外すという政策を始めればいい。」

これは、宇根氏の願いを述べたモノであろう。夢物語を語っている。現状の農業の崩壊は、このようなことを述べて済む程度を通り越している。

福島市長谷川浩氏は、次のようなメールを発信している。

「名前も知らなければ直接会ったこともない、となり集落の方から電話がかかってきました。先祖伝来の山(10ヘクタール)、田畑2-3ヘクタールと家屋敷を買ってくれる人いないかと聞かれました。自分なんか聞いてくるということは、藁にもすがる思いなのでしょうが、直接は何のお役にも立てません。農家の平均年齢は60台後半で、高齢化は国民全体よりさらに進行していますから、このような話は全国あちこちにあることなのでしょう。少し先を考えれば、異常気象、農家のなり手不足、世界的な人口増加など、近い将来食料危機が来ても不思議ではないと思うのですが、現実には農家でない人が農業で生計を立てるハードルは決して低くありません。誰にも欠かせない食料を生産する農業を担う農家もなくてはならない存在のはずですが、農家の後継者確保は、法律で誰かが責務を負うことにはなっていません。現実には有機農業の研修制度が象徴的ですが、損得勘定抜きに行う人たちの善意で支えられています。農協や市町村でも、損得抜きで後継者確保に活動している人もいるのですが、それは農協や市町村が義務でやっていることというよりは担当者にそのような理想があるからでしょう。」

長谷川氏が書いていると同じことが、香川の私の周囲にもある。農業の根っこが枯れかかっている。これは、戦後の自民党政府が一貫して行ってきた政策に基づいた結果である。根を枯らすことを、少しずつ、そして新自由主義政策はこのことを露骨に推し進め農村破壊をもたらしてきた。

2016年6月に農水省の事務次官に就任した奥原正明氏は「農業が産業化し、農水省が要らなくなるのが理想だ」と公言している人物である。こうした人物が次官に就任した背景にも官邸の意向がある。もともと次官ポストは、2012年9月から事務次官を務めていた皆川芳嗣氏が本川一善氏を後継指名したため、同期入省の奥原氏の次官の芽は消えたといわれていた。だが、2015年8月に就任後わずか10カ月で本川次官は退陣を余儀なくされる。農協の共同販売・共同購入を破壊し、農産物を買ったとき、資材販売価格をつりあげて企業の利益とするため、指定団体解体に反対する本川一善次官は更迭され、「酪農団体の廃止は無理だ」と抵抗した担当局長、担当課長も更迭された。そして、奥原次官は林業と水産業も民間に開放しようとしている。

レーガンやサッチャー、そして日本では小泉・安倍などの時代から進んできた新自由主義は、結局のところ、強者がやりたい放題に総取りを目指すというものなのだ。ようするに、お金がすべての世界なのだ。お金儲けを効率的にすることを目的としている。国家行政による再分配のための税金をできるだけ少なく、ビジネスへの規制も取っ払い、儲けた金銭はすべて自分の物とする企業最優先の、富める者が勝ちその利益を総取りするシステムである。それを、自己責任で競争させるシステムである。

この思想が社会の中の隅々までしみ込んでしまい、そのために、多くの人にとって行動の判断材料は金銭的な近欲なのだ。損得勘定のみで動いている。現実の社会を荒廃へともたらしているのは、まさしくこの思想そのものである。自分たちは資金もない負け組なのに、マスコミから日々流れ込む新自由主義思想を当たり前の前提として判断している。私の近所の人たちは、釣り針に千円札をぶら下げると動くと思えるような行動をする人たちがいる。これは、まさしく「新自由主義」政策の結果である。農村復興、帰農をもたらすには、農家への所得補償や農業育成が必要なのであるが、それを国策としていないためである。歴代の自民党政府は農業を自然死させることを、そして新自由主義に基づく最近の政策は、農業と農村を一気に破壊させようとしている。では、どうしなくてはならないか。

3 「天地有情の中での仕事の心地よさ」

宇根氏にもう少し語っていただこう。

「法人経営をしている友人の百姓が、「どうしても人を雇っているから、8時間以上働かせてはいけないので、いろいろと制約がでてしまう」と言います。本来、百姓であれば農繁期にはめっちゃくちや働くものです。その代わり、農閑期にはゆっくりと過ごします。なぜ百姓はそういうことができるのかというと、・・・働くことを支えているものの尺度が、経済的な合理性でなく、相手と一緒に働く喜びだからです。」

「逆にそれがなくて早く5時になって仕事が終わらないかな」ということになるわけです。だから、先の法人をやっている百姓に言うわけです。「そういう気持ちだったら、もうやめた方がいいぞ」と。べつに労働基準法違反をしろとは言わないけど、雇っている青年が、「もう5時か、ああ、あれもしたかったなあ」と思わないのなら、「もうちょっと仕事をさせてください」くらいの気持ちを持つてないのであれば、百姓として一人前に育たないし、あなたの経営も続かないだろう、と言うのです。」

この言葉は、私にとって、大変よく分かるものである。大規模経営にして人を雇うと、先に引用した「天地有情の中での仕事の心地よさというか、嬉しさというものが、知らないうちに自分を支えてくれている」なんていう気持ちには、労働者も、雇用主もなれない。労務管理に苦勞しながら利潤ばかりを求めたり、休暇と賃金の増加を望むだけの意識になってしまう。この両者は、働くことに喜びが薄く、農業に将来への夢と希望を持っているわけではないのだ。そして、この悲しみに、気付いていない。宇根氏の指摘通りであろう。

しかし、農家として自立する気持ちのない人たちに、収入を得るためだけで農事法人で働いている人たちに、このようなことを期待しても仕方がないではないか。そして、小規模経営農家は、もう崩壊の瀬戸際に来ている。さらに、農村へと帰農しようとする人たちが自立した農家となるには、高いハードルがある。だから、宇根氏の語る理想に心を寄せようと努めるが、素直にうなづくことは、とてもできない。

4 宇根氏の宗教的思想

再度、宇根氏の言っていることを、見てみよう。

「百姓の伝統的な天地有情の感覚は、当たり前すぎて表現されないままに、「無意識」に身体に(心に)蓄積されるものではないでしょうか。私は百姓のこの無意識を掘り起こして表現して、農本主義の土台思想にしようと考えているのです。」

農民は自分の行為を思想化させることが、なかなかできない。でも、現代社会ではこれを表現しないと理解できない。だから、「あえて伝えないといけないのです。ここに農本主義が再生しなければならない理由が見えています。」「・・・、それをどれだけ思想化しているか、理論化しているかということは問われるべきだと思います。」「・・・すごいことをやっているのに、・・・自覚が百姓には希薄な気がします。」

資本主義の弊害は、生き物の世界にはとっくに現れている。これは、単なる自然破壊ではない。農業に対する大きな警告であろう。生き物を守っていけるのは、百姓以外にはいない。「百姓がそれを守ろうとする余裕を確保する政策が必要です。」それなのに、もっとコストを下げろ、生産性を上げろ、規模を拡大しろという成長戦略は、大きな問題がある。国民の多くは、「自然を守る」ことには賛成するが、米や野菜をもっと安くして、と矛盾したことを平気で言う。社会の進歩や効率化、所得の増加、便利な事、なんていうことは、農業の本質と矛盾しているという思想が決定的に不足している。

「自分の足元を見ないといけないでしょう。どういう農業であろうと、カネにならない世界をどれだけ守り続けられるか。それにどれだけ時間を割けるか。自分の気持ちとまなざしと人生をカネにならない世界に賭けられるかどうかだと思います。」

一木一草に神が、魂が宿り、「山川草木悉皆(しっかい)成仏」という言葉は、日本の百姓の実感と混じり合っていたんだと思う。

「農本主義者に一貫しているのは、「人間は作物を作ることはできない」という感覚です。それは天地のめぐみ、つまり、天地からいただくものであって、人間が主体になってはいけないものなのです。・・・人間がやることと言えば、しっかりと手入れをすることだけです。・・・生き物自体の生命で育っていくのだと。・・・それをしっかりと見守って、生を全うできるようにしていく。この仕事こそが、百姓ができる一番すごいところなのだ、農本主義は見抜いていました。」「・・・天地のめぐみを引き出す、引き受ける境地の方が、人間としては幸せなんだということが、ほとんど語られなくなってしまった。」

「天地と自分是一緒で、別々ではないんだ」という、自分が天地と一体になって包まれているというような感覚になる瞬間が、今はおそらく、どんどん少なくなっています。」

ここには宇根氏の宗教的思想が語られているのであって、いまだかつて、このようにことに自覚的であった農民は多くいなかったであろう。では、どうすれば、よいのか。私はもっと、現実的に考えていきたい。このような、語りだけでは、・・・。

II 昭和の農本主義者たち一ファシズムに取り込まれる

もう一つ大きな問題がある。今までの「農本主義」と言われてきた思想には、大きな問題がある。このことを再認識しなくてはならないであろう。農本主義は、資本主義の発展による社会矛盾の深化に伴い、地下水脈のように繰り返し語られてきた。社会経済の危機の時、いつも強く語られてきた。しかし、その現実には、・・・期待は裏切られてきた。この農本主義という思想に意味はあったのであろうか。ルソーもプルードンも、そしてたくさんの方たちが、よく似たことを語ってきたが、・・・。日本では、特に1920年代末の世界恐慌に端を発する農村恐慌のもと、中小の自作・小作農が存続の危機に立たされることになった。この結果、反近代主義・体制批判的な性格を持つ新たなタイプの農本主義が台頭したが、それらは残念ながら超国家主義と結びついてしまった。兵農一致による体制変革を主張して五・一五事件に参加した橘孝三郎、農村自治の確立をめざす権藤成卿らの思想は、多くの場合中小農出身者を多く含む軍部内の青年将校に大きな影響を与え、二・二六事件の重要な思想的背景となったと言われている。また中国大陸への侵略、満州国の建国がなされると、これと結びついて農民を国策の先兵として動員していく運動がなされた。私たちは、この満蒙開拓移民の運動の結末を知っているが、なんと、橘孝三郎は敗戦後も、その思想を国民のための天皇という読み替えによって、生き残る。しかし、これはまったくひどいものである。彼の理想は美しかったかもしれないが、その理想に酔ってしまったようだ。現実的な思想ではなかった。彼は、農民のためと言いながら、向いている方向が間違っている。

Ⅲ 農本主義という保守思想が革新思想に、新しい社会の主導的理念に!

農本主義思想は、資本主義経済の進展とともに、繰り返し地下水脈のように語られて、そしてそのたびに裏切られてきた歴史がある。だが、近代社会へと大きなパラダイムチェンジが起こったフランス革命では、この思想が大きな働きをしている。何故、このような思想が革命を導いたのかは、検討に値するものであろう。1789年以降のフランス革命を導いたのはルソーの思想である。彼自身の意図するのともとは、ねじれながらではあるが、…。ともかく、この農本主義に基づく思想が、社会変革への大きな働きをしたことは、間違いない。そこで、この農本主義的言説が社会変革にとって大きな働きをしたルソー(1712-1778年 66歳没)の言葉を拾い出してみよう。

* 以下のルソーの文章は、京大人文研の共同研究 1951年『ルソー研究』桑原武夫編集岩波書店刊を改訂した1968年発行の第二版の第八章「農民史におけるルソー」河野健二氏の文章からの要約・引用である。

1 ルソーと農業・農民

ルソーの人生は、人間を内的にも外的にも開放すること、一切の貧困や圧政から、一切の不正や虚偽から人間を自由にすることにあつたと言ってもよかろう。ルソーの人民への共感は、人間の原始的な自然状態を賛美し、自然状態における人間の本来の道徳性や幸福を強調することであつたが、後半の『経済論』と『社会契約論』では、政治的思想家として社会と国家の根本的な在り方を提起している。

人間の本来の自然状態、自然人に最も近い人たちを現実社会の中で求めるならば、それは当時のフランス社会の中で圧倒的な多数を占めていた農民たちであつた。革命前のフランスの人口はおよそ2600万人、農民は2000万人で人口の70%であつた。彼は農民を自然人に最も近いものとしていたが、さらに農業労働そのものの価値を重視していた。

「あらゆる技術の中で第一位におかれるもの、もっとも尊敬されるべきものは、農業である。」*
「エミール」

「国家の外国からの独立を維持する唯一の手段は、農業である。諸君が、世界のすべての富を持っているとしても、もし自らを養うものをもたないならば、諸君は外国に依存するであろう。…商業は富を作る。しかし、農業は自由を保障する。」

* コルシカ憲法草案

「人が人間を愛し、そのために尽くすことを学ぶには農村においてであり、都会ではそれを軽蔑することしか学ばない。」* 書簡集

「都市は人類の墮落の淵だ。数世代の後にはそこに住む種族は滅びるか、頽廢する。それを新たによみがえらせる必要があるのだが、よみがえりをもたらすのはいつも田舎である。」

* エミール

「田園生活の平等と単調さは、他の生活を全く知らない者にとっては、何物にも代えられない魅力である。そこから、自己の状態に対する満足が生まれ…祖国に対する愛が生まれる。」

* コルシカ憲法草案

「諸君の村落の力が、革命を成し遂げ、その堅固さが革命を支えた。…よく深い人間の集まっている都市は、わずかな利権を得るために民族を売り渡した」

* コルシカ憲法草案

ここでは、都市と農村との関係が、階級的政治的観点で論じられている。

以下、次号

(あおの とよかず)

近況短信：ファンタジーにある「古い」

—団地タクシー奮闘記「脚の社会的価値」の巻— (24)

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは今年76歳になったキャリア6年目の老人です。タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー(老老)相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ100キロ近くある三輪自転車です。ヒトとモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが相当重くなります。坂道があるから余計大変です。「開業」して12年以上になりました。

10月27日は衆議院選挙と最高裁判事の国民審査の日でした。即日開票のTV生中継で、深夜まで開票結果を見届けたひともいて、それぞれ一喜一憂していました。まるでお祭りの「打ち上げ」のようです。万歳三唱もしますし、樽酒を割って振る舞われることも珍しくありません。なかには当選者の事務所まで行って、祝い酒の「おこぼれ」をちゃっかり頂く「果報者」もいます。

§

選挙は、なんとなく面倒でいかがわしく感じることに、ありませんか。定時になると放映される「政見放送」は「紅白歌合戦」ほど興味を引きません。どの候補者も国民の幸せのため、日本の平和のために政策や所見を表明しているのですが、“それ、本当に実現してくれるの？”と眉唾ものなのです。過去何十年も繰り返されてきた期待と失望の繰り返しだからです。“もうだまされない”と思っている人も多いのではないのでしょうか。こんどこそと意気込んでいる人、諦めないでもう一度と念じている人も少なくないとは思いますが。

選挙権を行使するためには、「脚」の役割が極めて重要です。個人の買い物や行楽のために不可欠であるだけでなく、国の政治に参加するという意味では「社会的価値」を濃厚に抱えています。

自分の足で自由に投票所に出向く人は多いというか、少ないというべきか、約半数強(全国平均53.85%)でした。投票日に都合がつかない人は期日前投票を行います。以前にくらべて手続きも簡単に便利になりました。選挙権も18歳に引き下げられ、こうして「首尾よく」選挙が行われ、国民の代表が選ばれることとなります。でも、投票率は低迷しています。

§

その理由を考えるに、この「選挙」制度に落ち度があったり、節穴があったりすれば、選挙の公正さや透明性が疑われてしまいます。今回も、1票の格差を巡って訴訟が各地で起こっています。議員一人が何人の有権者を代表しているのか、地域格差があるわけです。選挙区割の是正が行われてきたものの、有権者が最も多い北海道3区(約46万人)は最も少ない鳥取1区(約22万人)の2.06倍になり、一票の価値は0.5票に満たないといえます。北海道3区の代表は相対多数を背負い、他方の鳥取1区代表は相対少数を担うことになるのですが、その場合の選挙民は抽象的な選挙権者の数だけが拾われます。年齢や性別、所得の多い少ない、社会階層や地域特

性などは視野の外です。一言でいって、地域社会の歴史や抱えている問題や課題は、少なくとも「投票日」には関わりないものとして実施されます。地域の声や住民の叫びは、ただの数字に抽象化されて消え失せてしまいます。

およそ、多数決という一見して合理的な決済方法は、無感情で無慈悲な数字だけの結果に落ち着きます。その「決済」の裏側には、民主主義の理念から、いつのまにか排除されてきた人たちがいます。訳あって字の書けないひと、日本に居住しているのに選挙権のない人、そもそも心身に障害があってその「能力」を持ち合わせていない人たち。その数、わずかしかないと言ひ、誤差の一部だと言ひ切ってしまう人たち（先の選挙区割の話と同様）もいますが、果たしてそれで済ませていいものなのでしょうか。代表制の制度自体に疑いの目が向けられます。

§

いつになく、前置きが長くなりました。私たちが当然の権利と思っている選挙権の行使が、思ひのほか「けつまづいて」いるのではないかと感じているからです。実際、私は今になってなお憤っています、心底から。団地タクシーの運転をされていて、そう思います。

ここで運転するからこそ感じるのですが、歩行が困難な人たちは、はなから投票をあきらめているのではないか？ただ坂道の歩行が困難だからというだけでなく、「一人前」から「半人前」に身を“削り落とした”自分にモノいう権利などないのではないか、どせ私が1票投じても世の中変わらないのでは、とと思っている節があります。これは体が不自由だったり高齢者であるだけでなく、社会で孤立している若者たちにも当てはまる話ではないでしょうか。いわば、「社会的承認」の欠如が広く蔓延しているのではないか、ということです。「脚」と「承認」は社会という仕組みのなかで連結しています。

そうしていると、アメリカ大統領選挙の話題が頭に浮かびます。州によって異なるのですが、おそらく「団地タクシー」を常置しているところはないと思います。いえいえ、そういう話ではありません。国土が広いという事情もありますが、なにせクルマ依存の「脚」システム社会ですから、選挙権を行使することは容易なようで難儀なことではないか、と思うのです。

民主主義の“模範”である、あるいは“であった”アメリカでは、2020年トランプによる「投票疑惑」によって、「少なくとも30州で78の投票制限法が制定された」と報じられています。「郵便投票の受付窓口の制限や、投票者の身分証明要件の厳格化、身体の不自由な人や英語が不得意な人への補助の抑制、車に乗ったままで投票できる『ドライブスルー投票』の禁止など」（「朝日新聞」11月3日「グローブ」第314号）が指摘されています。

§

投票日前日、脚の不自由なご婦人から、投票日の団地タクシーの運行に関する問い合わせがありました。通常、日曜日は運休にしているのですが、7月7日の東京都知事選挙の折に特別に運行したこともあってのお尋ねです。この都知事選では、予想に反して利用者が少なく、午前11時から午後3時まで、タクシー2台、運転手4名で臨んだのですが、わずか6名の利用でした。

ということもあって、また運転手を確保できなかったという事情もあって、10月27日の運行は実施しませんでした。この団地住民が住む八王子市24区は話題の渦中にあつたのですが。

これでよかったのか？住民の投票する「脚」を奪ったのではないか？なんとかならなかつたのか？いまなお、忸怩たる思いでいます。

* 「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

(みやぎき あきら)

【研究ノート】

市民の平和力とは何か（中・続）

（3）－3 「文化の超自我」と交換様式論

中村共一

- （1）「永遠平和」論の特徴
- （2）「永遠平和」論の超越論的視座 一人間の自然本性－（以上、51号）
- （3）永遠平和の力
 - 1 フロイトの「死の欲動」（53号／中）
 - 2 文化と「超自我」
 - 3 「文化の超自我」と交換様式論（本号／中・続）
- （4）「永遠平和」と「市民の平和力」（次号／下）
 - 1 憲法9条と「非戦の論理」
 - 2 「完全な市民社会」への新「対抗文化」運動

（3）－3 「文化の超自我」と交換様式論

柄谷行人さんは、『世界史の構造』（2010年）¹や『力と交換様式』（2022年）²において、生産様式の視点に立つマルクス主義の史的唯物論を、「交換様式」³の視点から捉え返し、交換にともなう「力」を見いだすとともに、交換様式の社会的・歴史的な構造のうちに、国家と資本を超える「力」として「交換様式D」を提起しています。

ここには、後期フロイトをこえようとする問題意識があります。フロイトは、すでに前号でみたように「死の欲動」の視点から、「文化」における「超自我」の問題を発見し、それが自我ばかりでなく「共同体」をも超える普遍史的な論理を見いだしています。しかし、「自我の文化」（抑圧するもの）と「文化の超自我」（「抑圧されたものの回帰」）と区別し、捉えられていく「文化」概念自体の歴史性については、具体的に展開されているわけではありません。というより、そもそも精神分析には、当然のことながら、文化に対する普遍史的な把握を具体化する概念的な装置が用意されていません。したがって、フロイトにとっては「後世の課題」と述べるほかなかった⁴。

柄谷さんの『力交換様式』は、この課題を引き受け、交換様式の視点から、「共同体の超自我」の問題を新たに「交換様式D」の問題として提起しているように思えます。同時に、そこから、戦争のない永遠平和への展望——「世界共和国」への未来——を語っていくのです。が、ここでの関心は、柄谷理論自体ではなく、無意識の領域を踏まえ、永遠平和をもたらす「力」とは

何かを明らかにする論理に向けられています。この点に焦点をおき、柄谷さんの問題提起をみていきたいと思います。

1

前号でみたフロイトは、人類史における氏族社会の移行を、「エディプス・コンプレックス」の論理に依拠しながら「抑圧されたものの回帰」として捉えていました。柄谷さんも同様に、「氏族社会への移行」に目を向け、フロイトとは異なり、「力と交換様式」の歴史的形態に目を向け、交換に付着する「力」の起源を捉えることによって、「贈与交換」（交換様式A）に基づく氏族社会の成立を説いています。そしてまた、フロイトが「共同体の超自我」と捉えた永遠平和への「力」を、柄谷さんは、交換様式としての普遍史のうちに捉え返し、近代社会構成体（資本主義社会）における国家と資本を超える交換様式Dとして明らかにしています。このように柄谷理論においては、永遠平和をうむ「力」は、近代社会構成体の変革と結びつき、戦争を生みだす国家と資本を「超える」ことなしに語れないものなのです。そしてまた、それが、永遠平和への対抗運動にとっても、その限界と可能性を指し示すものとなります。論点を整理しつつ、柄谷理論を吟味していきましょう。

まず最初に、「永遠平和」と結びつく「力」の起源にかかわる点です。この点を、柄谷さんは、「氏族社会への移行」の条件となった「贈与交換」の生成にもとめ、その交換において「贈与の力」を見いだしています。そしてこの力は、人類が定住する以前の社会を特徴づけ、定住後に失われた「原遊動性（U）」⁵が「回帰」したものであり、それゆえに「霊的な力」であったと捉えていくのです。

人類が定住したのち、さまざまな葛藤と対立が生じた。それを解消しだのが、交換様式Aである。それは、フロイトの言葉でいえば、「忘却されたものの回帰」として生じた。それは反復強迫的である。ただし、「忘却されたもの」とは、殺された原父ではなくて、原遊動性（U）である。それは定住後に失われたが、消滅したのではない。それは、贈与交換を命じる霊としてあらわれた。それによって、原父のようなものの出現を決して許さないような兄弟同盟（氏族社会）が作り出されたのである。⁶

定住化とともに形成された共同体は、「その内部での規律」と同時に、「他の共同体との交換」を必要としています。そこで始まったのが「贈与交換」（交換様式A）です。この交換は「たんに人々の合意や協力によってできたのではない。つまり、人々の『意識』によるのではない。もしそうであれば、交換は成り立たなかつただろう。それを成り立たせたのが、各人の意志を越えた『霊』の力である」⁷と述べ、贈与交換に付随した「霊的な力」に、交換の「力」を見いだしたのです。

定住以前にあった「遊動的なバンド社会」⁸は、必ずしも明確に捉えうる歴史社会ではありません。しかし、柄谷さんは、その特徴を、次のように捉えていきます。

バンド社会は共同寄託、つまり、再分配による平等を原理とする。これは狩猟採集の遊動性と不可分離である。彼らはたえず移動するため、収穫物を備蓄することができない。ゆえに、それを私有する意味がないから、全員で均等に分配してしまう。あるいは、客人にも振る舞う。これは純粋贈与であって、互酬的ではない。収穫物を蓄積しないということは、明日のことを考えないということであり、また、昨日のことを覚えていないということだ。遊動的なバンド社会では、遊動性（自由）こそが平等をもたらすのである。⁹

このように「遊動的なバンド社会」では、その「遊動性」ゆえに、「純粹贈与」を特徴とし、また遊動性の「自由」が「平等」をもたらします。「遊動的な狩猟採集民たちは、社会的な葛藤や縛りをもたなかった。したがって、特に利己的なわけでも利他的なわけでもなかった。」¹⁰のです。それが、原遊動性(U)の特徴です。しかし、定住は、「無機的な状態」から「有機的な状態」(共同体)に変化するものであるがゆえに、人々にさまざまな葛藤と対立を孕み、また定住の危機をもたらします。それを解消したのが、贈与交換だということです。そのさい、「原遊動性(U)」(平等性)が、定住後に消滅したのではなく、贈与交換を命じる「霊」としてあらわれたと捉えるのです¹¹。こうした「力」の起源に対する把握は、フロイトの「死の欲動」(無意識)論をふまえたものです。したがって「交換」に付随する「霊的な力」は、無意識的な「反復強迫」としてあり、人間の意志の力ではどうすることもできない「観念的な力」だということになります。フロイトの「欲動」は「意識には上がってこないが意識を駆り立て、ゆがませてしまう何か」¹²です。それと同様な意味において、「霊的な力」は、無意識がもたらす「反復強迫」として、他者に贈与交換を強いていくのです。

人間の「普遍史」を「自然史」として捉えるのなら、やはり、人間の「無意識」がもつ、こうした「自然本性」は無視できない。柄谷行人さんが、フロイトの「死の欲動」を原遊動性と捉え返し、定住後の社会(交換様式A)において、その「霊的な力」が贈与交換の「力」となると説いていくのも、交換様式自体が強靱な自然性・社会性を備えた存在であってみれば、妥当な理解の方法と考えられます。とすれば、こうした理解の方法は、フロイトの文化論を深め、人間の「普遍史」において世界共和国(永遠平和)の問題を捉えていく有意義な視点だといえます。

2

第二には、「贈与交換」としての交換様式Aが、社会を構成する他の交換様式の「基礎」となり、交換様式による世界史(普遍史)の構造を形づくっていくとする点があります。

柄谷行人さんは、その社会構成体を、交換様式A(贈与と返礼)、交換様式B(支配と保護)、C(貨幣と商品)といった「A、B、Cの交換様式の結合体」と捉え、そしてまた、B・Cを揚棄する交換様式D(X)が付随していると考えます。また、その「結合体」の歴史は、「どれがドミナントであるかによって、その歴史的段階が区別され、その段階的な歴史的特徴——氏族共同体→国家→資本——が掴まれています。こうした交換様式が成す社会構成体の「普遍史」は、生産様式から捉えられた経済一元的な「史的唯物論」を批判したものであり、国家やネーションの自律性を踏まえ複合的に社会構成体を捉える画期的な歴史観を提起するものです。したがって、ここには多くの斬新な問題提起が含まれています。しかし、ここでは、柄谷さんの歴史理論にそって、絶対平和の「力」につながる、その「力」の論理をみていくにします。また、B・Cを揚棄する交換様式Dについては後に取り上げます。まずは「A、B、Cの交換様式の結合体」の歴史に対する柄谷さんの見方をみていきます。

その歴史を簡潔に整理した次の一文をご覧ください。

交換様式Aは人類が定住した時点で生じた。そのとき、人々は太古の遊動的段階にあったような在り方ができなくなったが、別の形でそれを保持しようとした。つまり、定住を強いられた諸個人は、定住共同体の掟に自発的に従うようになったが、同時に、遊動的な段階にあった個性・独立性を保持したのである。それが氏族社会である。しかし、国家の出現とともに、事態が変わった。氏族社会が終わっても、人々は国家の下で村落共同体を維持したが、それまであった個性・独立性を失った。交換様式でいえば、そのとき、AがBに抑えこまれたのである。

その後、近代国家・資本主義の発展、つまり、BとCの拡大とともに、村落共同体Aは解体されていった。しかし、それはある意味で回復された。つまり、資本主義経済の下で、ネーション（想像の共同体）が形成されたからである。とはいえ、それはAの“低次元での回復”にすぎない。その結果として成立したのが、資本＝ネーション＝国家である。¹³

また、こうした「歴史」を「交換から来る力」にそってみると、次のような説明があります。

交換様式Aの後に、別のタイプの交換、つまり、交換様式B（支配と保護）とC（貨幣と商品）が成立します。簡単にいうと、Bは国家を、Cは資本を支える交換様式です。しかし、いずれも、Aに存する「力」の変形であるような力にもとづいています。つまり、Aが霊によるのだとしたら、BやCは、高次元の霊によるわけです。交換様式Cに基づく資本制社会でも、「霊」は残りつづけます。今、多くの人が、市場経済は物質的で合理的に動いていると考えているでしょうが、それは物神崇拝の極致というべきものです。¹⁴

柄谷さんによれば、交換様式の歴史は、交換様式Aにある「力」を基礎とした、「霊的な力」の歴史的な展開としてあります。太古の遊動的段階にあった原遊動性（U）の個性・独立性が、定住後において、人間の意志をこえた「霊的な力」として回帰することによって交換様式Aが成立する。そして、交換様式B・Cは、そのような交換様式Aに存する力の「変形」としてあり、高次元の「霊」＝「観念的な力」とみなされています。この説明は、分かりやすいようで、分かりにくい。「交換様式」の違い（区別）は明快であるものの、その関連については理解しにくいのです。そもそも「霊」の「高次元」とは何を意味するのか、僕には未だよくわかりません。ですので、この後は、僕なりの独自解釈が加わることになるかもしれません。

交換様式Aは、定住以前の「原遊動性（U）」が、無意識において氏族共同体に「回帰」したとされています。その「回帰」は、「原遊動性（U）」が備えていた人間の「個性・独立性」——したがってまた「純粋贈与」——を、交換をもたらす「力」として「霊化」するものであり、定住後の諸個人が、人間の意志をこえた交換様式に従属していくことを意味します。交換様式A・B・Cのそれぞれが優位する歴史とは、それらの交換様式によって支えられた霊的・他律的な社会構成体の歴史といえます。ただ、その歴史の出発点に位置する氏族共同体の交換様式Aは、贈与により「強い返礼」が同じ「贈与」である限り、いまだ純粋贈与が残存した「低次の霊」にとどまっています。が、交換様式B・Cに支えられた「国家」や「資本」は、「贈与の力」を、前者が国家における「支配と保護」に、また後者が資本を成立させる「貨幣と商品」に附着させ、仮象化させています。この仮象化といった点からすると、そこに「霊の高次元化」があるようにも理解できます。さらに、前者は、法にもとづく集合的な支配ですが、後者は、個々人の生活（生産・消費）に対する全般的な支配となりますので、まさに人々に対する支配の深さ・広さからして、「物神崇拝の極致」であり、「最高次元」の霊的支配とみなせます。こうした理解が正当であるならば、交換様式A・B・Cのそれぞれが優位する歴史とは、霊的な他律的支配の歴史であり、人間の「個性・独立性」が、「抑圧されたもの」としてある歴史といえましょう。

そこで、最も問題となるのが、「最高次元」にある交換様式Cに基づいた資本主義社会——労働力までも商品化する最高度に発展した商品経済社会——です。柄谷さんによれば、資本主義社会は、「資本＝ネーション＝国家」として社会構成され、「国家」と結合しながら、「資本」が優位する社会です。また「資本」が孕む階級対立は、「ネーション」（想像の共同体）によって緩和・抑制される仕組みを持っていました。しかし、重要な点は、社会構成体が「資本＝ネーション＝国家」として三位一体的な構造をもっており、強固な体制をつくっている点でしょう。例えば、国家が資本の利益を支え、その実現に不可欠な役割を果たしています。資本の利益を実現

する労働力は、国家の教育政策や福祉政策によって陶冶されています。また資本の活動は、国内にあっては「法」によって、国外にあっては「軍事力」によって保護されています。したがって、資本の発展は、常に国家の発展となり、また逆もしかりです。

とすると、「資本の限界」も、同様に「国家の限界」を意味するものとなります。資本蓄積の過剰は、一方で、資本輸出の増加とともに、グローバルな商品世界の爛熟をもたらし、他方で、諸国家において貧困・失業・飢餓・暴力をもたらしています。また、グローバルな資本の移動・拡大は、ヘゲモニー国家・アメリカの衰退をもたらし、国際的な競争や利害対立にとどまらず、暴力的な紛争・戦争を引き起こしています。さらにいえば、「資本」の発展は、資本や国家の前提としてある人間や自然までも破壊しつづけています。自然の乱開発による自然資源の枯渇や、廃棄物による環境汚染（温暖化！）は、資本自らが国家を「弱体化」していく「狂気」（自己破壊）ともいえます。そればかりか、社会全体の商品化により、国民のヴァーチャル・リアリティ化、孤立化、少子化を進展させ、これまで体制的な矛盾の顕在化を抑えてきた「ネーション」（互酬）までも解体させています。ですので、資本主義社会の危機は、国家を含めた社会構造的な危機とみなすべきです。したがってまた、そこからの脱却も全体的な「革命」であるほかない。交換様式の構造と歴史を捉える柄谷理論は、このような点を強調するものなのです。

いま人類が直面する戦争、環境破壊、経済的格差といった三大問題は、柄谷さんが指摘するように、結局のところ、「国家と資本の問題に帰着する」¹⁵ものといえます。とすれば、いかにして国家と資本を超えることが可能なのか。これが問題となります。柄谷さんは、「交換様式Cが支配的となる資本主義社会のあとで出現するような社会の原理」¹⁶として交換様式Dを提起しています。したがって、このDは、体制変革の力としてあり、たんなる永遠平和の力にはとどまらないのです。

3

国家や資本を揚棄すること。「それを可能にするのは、高次元でのAの回復、すなわち、Dの力によってのみである」¹⁷と柄谷行人さんは断言します。この交換様式Dについて、様々な箇所でも説明され、繰り返し示されるのが、この「高次元でのAの回復」という点です。交換様式Aの特徴は、「互酬」（ネーション）ですので、その高次化で想定されるものは「純粹贈与」（原遊動性の「回帰」）であり、それが、国家と資本を超える「社会の原理」だと理解することができる。そう思うのですが、交換様式Dは、この点の理解にとどまるものではありません。例えば、アウレリウス・アウグスティヌスの『神の国』（426年）を検討しながら、柄谷さんは、次のように語っています。

アウグスティヌスの考えは矛盾に満ちているように見えるが、交換様式から見ると理解できる。人類はエデンの園にいたとき、いわば原遊動的な状態にあった。しかし、それは定住化とともに失われ、A・B・Cが支配する社会が形成された。ゆえに、エデンの園に戻ることが目指される。それがDであるといってもよい。その場合、エデンの園への回帰は、あの世においてではなく、この世において生じるのでなければならない。すなわち、Dとは、この世からの脱却ではなく、この世におけるA・B・Cからの脱却なのだ。そして、Dは人間の願望や意志によってもたらされるのではなく、それらを超えた何かとして到来する。¹⁸

このように、国家と資本を超える交換様式Dは、「A・B・Cからの脱却」——したがってまた「資本＝ネーション＝国家」からの脱却——を意味するものです。ですので、かつて「革命」は、国家による社会主義革命として、もっぱら「資本」の揚棄が追求されるものでしたが、柄谷さんは、そもそも革命は近代社会構成体（「資本＝ネーション＝国家」）からの「脱却」にある、

と考えるのです。ソビエトの解体が、国家の変革が棚上げされ、国家官僚制の問題——政治的自由——を克服できなかつたとすれば、この主張は、有意味な論理だと言えます。この点に加え、もう一つの重要な点があります。それは、交換様式Dが「人間の願望や意志によってもたらされるのではなく、それらを超えた何か」として説明されている点です。Dは、ともすると「アソシエーション」「世界共和国」といった「実践原理」と受け止めがちなのですが、柄谷さんの意図はそこにはなく、むしろ、人間の願望や意思をこえた「何か」として積極的に主張するところにあります。したがって、例えば、マルクス主義者の「科学的社会主義」論に対して、次のような批判がなされていくことにもなります。

それ（「科学的社会主義」…中村）は、国家や資本主義経済を、人々の自由な意志によって制御できるものであるかのように見なしている。しかし、交換様式の観点からみれば、CやBは、人間の意志をこえた「力」をもつ。民主主義的な国家体制において、人々は、自由になったと考えているが、CやBの「力」に対して、一層屈從的になったにすぎない。そして、そのことに気づきもしない。しかも、それが“科学的”な見方だと考えている。¹⁹

このような手厳しい批判を加えるのは、柄谷さんが、交換様式Dの問題が、たんに思想の問題ではなく、科学の問題だとみているからでしょう。『力と交換様式』では、四部構成からなる「第四部」に「社会主義の科学」が置かれ、その結論的な末尾で「交換様式Dという問題」があらためて位置づけられてくるように、あくまでも「社会主義の科学」の問題として取り上げています。脱却すべきは、たんに「資本」ではなく「資本＝ネーション＝国家」にあり、そこからの脱却が、新たな「科学の問題」として提起されているのです。これは斬新な問題提起です。思えば、この問いは、かつてなされたことがない。これまでは、もっぱら「思想の問題」として議論されてきたからです。柄谷さんも、この科学論の系譜を、次のようなかたちで語られています。

マルクスはこの問題を、神を持ち出さずに考えようとしたとあってよい。しかし、彼が初めてそうしたのはない。マルクス以前にも、それを考えた者がいた。カントである。彼は社会の歴史を、自然の「隠微な計画」として見た。つまりそこに、人間でも神でもない何かの働きを見出したのである。そして、彼はそれを自然と呼んだ。だが、そこに謎が残ったままであった。

私の考えでは、自然の「隠微な計画」とは交換様式Dの働きを意味する。たとえば、カントが『永遠平和のために』で提起した「世界共和国」の構想は、人間が考案したものにはすぎないように見える。その意味で、交換様式Aと類似する。したがって、無力である。ゆえに彼の提案した国際連合は、以来2世紀にわたって、つねに軽視されてきた。しかしそれは、消えることなく回帰してきた。今後にもあらためて回帰するだろう。そして、そのときそれは、AというよりもDとして現れる、とあってよい。²⁰

この文脈に見られるように、自然の「隠微な計画」という点から捉えた、カントの「世界共和国」構想に対し、「交換様式Aと類似する。したがって、無力である」とみなしながらも、柄谷さんは、カントを交換様式Dという問題性において評価しています。依然として、予言めいたカントの説明を受け止めていくわけですが、この予言の根拠をどこに求めるのでしょうか。これを解くカギこそ、ほかでもない「交換様式」という概念にあるとみるのです。あくまでも交換様式Dは、交換様式A・B・Cを「脱皮」するものとはいえ、それらの延長線上に位置づけられたものです。ですので、「交換様式」としての共通性がそこにあります。だが、その共通性とは何か。端的に言って、それは、「交換から来る力」にあり、「霊的な力」という点にあるように思えます。フロイトが「死の欲動」という無意識の領域から「共同体の超自我」を見いだしていったよ

うに、柄谷さんも、「原遊動性（U）」の回帰として、「無意識」の領域を媒介しながら交換様式A・B・Cをとらえ、また交換様式Dも同様に無意識的なものとして捉えているのです。したがって、交換様式A・B・Cを「脱皮」するものと革命的な性格が与えられているにせよ、それは人間の意志によるものではないのです。あえて言えば、繰り返す資本主義の抑圧や世界戦争の勃発のなかで、「抑圧されたものの回帰」として未来において到来すると考えられているのではないか。このように理解できるとすれば、交換様式Dは、無意識の問題を踏まえた「自然史」の未来において明らかにされた「社会の原理」を意味するものとなります。

こう理解してみると、柄谷さんは、永遠平和は、国家と資本を超える革命と捉えながらも、無意識（フロイトが捉えた「反復強迫」）の未来において展望されていることとなります²¹。もとより永遠平和が国家の対立性を揚棄していくものであれば、国家の枠内にある「対抗運動」（平和運動）が有効であるはずがない。また、その国際的な連帯も、現実的な実現性を見いだすににくい。にもかかわらず永遠平和が可能だとすれば、その根拠をどこにみいだすのか。柄谷さんの交換様式Dの提起は、こうした難問に応え、世界共和国（永遠平和）とは何か、を「科学的な問題」として解き明かすものなのです。この意味で、交換様式Dは、永遠平和への「力」として、「希望」を与えるものといえます。

4

永遠平和とは、柄谷さんの言うように、交換様式A・B・Cを脱却する未来として考えていくほかない。それらの交換様式は、人々の「個性」「独立性」を、共同体・国家・資本の他律的な諸関係によって、抑圧していくものでしかないからです。永遠平和は、それとは異なり、個人の自律性・平等性が優位おかれ、カントが主張したように、他者を手段ばかりでなく、目的とみなしていく点に、成立していくものです。国家と資本が結合した「近代社会構成体」では、「他者を手段化する」関係を本質としており、「資本」のもとでは競争状態（経済的暴力）が、「国家」のもとでは戦争状態（軍事的暴力）が、避けられません。そうである以上、国家と資本を超える未来は、「世界革命としての永遠平和」にあると考えざるをえない。柄谷さんの提起する交換様式Dは、確かに、そのような未来を科学的に見通すものと受け止められます。

繰り返すようですが、カントは、すでに第一章でみたように、近代国家の「非社会的社会性」に戦争の原因とらえ、国家の敵対性を無くしていく方向において、永遠平和（「完全なる民主社会」）を展望しています。その実現の「力」としては、戦争こそが絶対平和をもたらすという「自然の狡知」に求めていました。しかし、「自然の狡知とは何か」を解き明かしたわけではなく、疑問が残ります。この点を、追究したのが、フロイトでした。第一次大戦後、戦争神経症に見られた「反復強迫」から、「抑圧されたものの回帰」としての「超自我」を見だし、これが「共同体の超自我」ともなり、永遠平和への「力」（良心）となっていると捉えたわけです。このフロイトの「超自我」論を、柄谷行人さんは「力」の問題としてさらに掘り下げ、「交換から来る力」と捉え返します。そのうえで、交換様式に基づく普遍史の展開を通して、近代社会構成体（資本＝ネーション＝国家）の後にくる「社会の原理」を明らかにしています。が、同時に、それは「永遠平和の力」を科学的に提起するものでしょう。

交換様式A・B・Cの変革と結びついたものだけに、交換様式Dは、「世界共和国」（永遠平和）の実現として実践的に理解されがちです。しかし、そのDの内容が具体的に示されることはありません。むしろ、意識的にその具体化を拒絶しています。なぜか。このDも、交換様式A・B・Cと同様に、人間の意志ではどうにもならない「無意識の問題」と考えられているからです。ですので、『力と交換様式』の最後の部分で、「今後、戦争と恐慌、つまり、BとCが必然的にもたらす危機が幾度も生じるだろう。しかし、それゆえにこそ、“Aの高次元での回復”としてのDが必ず到来する」²²と結論づけられてくるわけです。交換様式Dが、原遊動性の

「回帰」として捉えられ、無意識の問題を媒介として説明するほかないとすれば、この結論は、正当な提起です。とはいえ、無意識の問題は、もともと意識的に捉えることが困難な問題だけに、「神秘化された論理」ともなってしまう。したがって、交換様式Dの問題は、永遠平和の「力」を科学的に根拠づけるものではあっても、それは「予言的なもの」にとどまり、「希望」として受け止めるほかない。しかし、永遠平和の力は、そこにとどまるものではない。永遠平和への実践が、むしろ交換様式Dを意味あるものとするのではないか。したがって、交換様式Dの存在を主張するだけでなく、それが「資本＝ネーション＝国家」をいかに改変させるのか、が明らかにされる必要があるのです。いわば、交換様式Dによる構造革命の課題がある。その意味では、交換様式Dは、あらためて意識次元と連結され、実践的な課題が明らかにされなくてはならない。そんな疑問を感じます。

マルクスは、『ドイツ・イデオロギー』のなかで、「共産主義」を、「現在の状況を止揚する現実的な運動だ」²³と捉えていましたが、またそれは柄谷行人さんの『マルクス その可能性の中心』以後の中心的なテーマでもあったように思います。『世界史の構造』や『力と交換様式』の解明の結果、どのような「現実的な運動」が新たに見えてくるのか。この点が残されてあるように思えます²⁴。永遠平和の力とは何なのか。それは交換様式Dの問題だとするのは、まさにそのとおりです。ですが、そこに至る「現実的な運動」がなければ、永遠平和どころが「人類の破滅」もありえるのではないか。ともあれ、永遠平和の課題は、無意識にとどまるものではなく、依然、永遠平和を求める私たちの実践的な「純粹贈与」（意志の力）がカギを握っているように思われます。

(なかむら きょういち)

(注)

- 1 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、2010年。
- 2 柄谷行人『力と交換様式』岩波書店、2022年。
- 3 柄谷行人さんは、交換様式のタイプ、およびそれに基づく近代社会構成体を、以下のような表で示されています。（『世界史の構造』岩波書店、2015年、15頁）

| | |
|---------------------|------------------|
| B 略取と再分配 (支配と保護) | A 互 酬 (贈与と返礼) |
| C 商品交換 (貨幣と商品) | D X |

図1 交換様式

| | |
|-------|---------|
| B 国 家 | A ネーション |
| C 資 本 | D X |

図2 近代の社会構成体

- 4 S・フロイト『幻想の未来／文化への不満』中山元訳、光文社、2007年、290頁。
- 5 柄谷行人『遊動論』文芸春秋社、2014年、参照。
- 6 柄谷行人『力と交換様式』岩波書店、2022年、95～96頁。
- 7 同上、81頁。
- 8 K・マルクスは、この社会の特徴を次のように捉えていました。

「放浪生活〔Hirtenwesen〕、総じて移動が生存様式の最初の形態であり、部族は一定の居所に定住しているのではなくて、手当たり次第のものを食いつくして〔移動して〕いる——人間は生まれつき定住性をもっているわけではない（人間は、猿のように一本の樹のうえに住みついていることができるほど特別に豊かな自然環境があるのでなければ、野獣たちと同じように放浪していた）——と想定することができるのだから、自然的な共同体組織である部族共同集団（Stammgemeinschaft）は、土地の共同的取得（一時的な）および利用の、結果ではなく前提として現われる。人間がようやく定住するにいたるとき、この本源的な共同集団〔Gemeinschaft〕が多かれ少なかれこうむる変化がどのようなものであるかは、さまざまな外的、気候的、地理的、身体的、等々の条件によっても、また彼らの特殊的な自然的素質等々——彼らの部族的特性——によっても左右されるであろう。」（K・マルクス『1857-58年の経済学草稿』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店 1981年、119頁）

- 9 柄谷行人『世界史の構造』2015年、66頁。
- 10 柄谷行人『力と交換様式』岩波書店、2022年、94頁。
- 11 同上、96頁。
- 12 同上、87頁。
- 13 同上、389頁。
- 14 柄谷行人「普遍的な世界史の構造を理解するために」（第4回）週刊読書人ウェブ、2019年3月4日
- 15 柄谷行人『世界共和国へ』岩波新書、2006年、224頁。
- 16 柄谷行人『力と交換様式』岩波書店、2022年、159頁。
- 17 同上、395頁。
- 18 同上、208～209頁。
- 19 同上、393頁。
- 20 同上、396頁。
- 21 山田広昭さんは、交換様式Dを「希望の原理」だと評価しています。僕もそのように理解すべきだと思います。（「希望の原理としての反復強迫」群像、2023年2月）。
- 22 柄谷行人『力と交換様式』岩波書店、2022年、396頁。
- 23 篠原三郎さんは、『力と交換様式』の読後感のなかで、この点を鋭く見抜いていました。論考の末尾で、思い出された一言として、マルクス『経済学批判』の指摘を取りあげ、「例の『経済学批判』の、とかく評判わるい史的唯物論にでてくる『人間はつねにみずから解決しうる問題のみを問題とする』（わたしの学生時代の古めかしい宮川実訳、青木書店、1951年）のことで。『世界史の構造』でも今回の新著でも、ここの箇所のみ省略されてますね。新たな視点からでも取りあげることができないものなのではないでしょうか!？」と指摘されていました。（未掲載論文「『希望』としての『交換様式』論」2022年11月1日）
- 24 マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳、岩波文庫、71頁。